

図13 昭和62年度平城京内発掘調査位置図

表2 昭和62年度 平城京内発掘調査地一覧

調査次数	調査地区	面積(m ²)	調査期間	備考	発掘担当者	掲載頁
183- 1	左京四条一坊十五坪	280	5. 6 ~ 5. 20	阪神コンサル タンツ	金子 裕之	38
※183- 2	西大寺西南門堆定地	90	5. 8 ~ 5. 16	岡本 樞太郎	上野 邦一	
※183- 4	法華寺旧境内	8	6. 4	中谷 実	寺崎 保広	
※183- 7	法華寺旧境内	20	7. 6 ~ 7. 10	見 光 寺	松本 修自	
※183-10	左京二条四坊二坪	130	9. 10	井田 雄昭	毛利光俊彦	
183-14	右京一条二坊六坪	150	10. 2 ~ 10. 15	泉 谷 ビル	田辺 征夫	40
183-18	右京二条三坊一坪	425	10. 26 ~ 11. 14	岡 沢 ビル	田辺 征夫 小野 健吉	41
※183-20	法華寺旧境内	9	3. 3	川崎 政一	千田 剛道	
183-21	阿弥陀浄土院	94	3. 10 ~ 3. 22	武嶋 隆夫	高瀬 要一	43
184	左京三条二坊七坪	6,800	4. 1 ~ 9. 6	そごう予定地Ⅱ そごう予定地Ⅲ	玉田 芳英	44
186	左京三条二坊七坪八坪		9. 7 ~ 3. 31		井上 和人	
189	左京二条二坊十四坪	1,430	2. 1 ~ 4. 15	東 鮎	佐川 正敏	63
125- 5	九条大路・坪境小路交点	70	7. 15 ~ 7. 23	県道城廻り線	綾村 宏	78
次数外	西大寺境内	324	7. 20 ~ 8. 19	防 災	毛利光俊彦	79

1 左京四条一坊十五坪の調査 第183-1次

平城京第183-1次調査は、集合住宅建設の事前調査として、奈良市四条大路2-860-1において実施した。調査面積は約280㎡、調査期間は1987年5月6日(月)～5日20日(水)である。

ここは平城京左京四条一坊十五坪の西北隅に近い部分である。開発予定地の状況から南北20m、東西14mの発掘区を設定し、調査を実施した。調査区の層序は旧耕土、床土、黄褐粘質土、灰色砂質土の順に堆積しており、床土直下の黄褐粘質土、灰色砂質土の上面で遺構を検出した。奈良時代の遺構は、掘立柱建物5棟、掘立柱塀7条である。これらは、柱穴相互の重複状況や主軸方位の振れによって四期に分けることができる。

A期 南北棟建物SB4001と塀SA4006とがある。SB4001は、西と北に廂をもつ梁間3間、桁行3間以上の建物である。柱間は2.4m(8尺)等間である。SB4001の北東に、東西塀SA4006があり、1間分を検出した。柱間は2.4m(8尺)である。

B期 東西棟建物SB4002・4003と塀SA4007・4008・4009がある。SB4002は梁間2間、桁行1間以上の建物で、柱間は3m(10尺)等間である。柱掘形より大きな抜き取穴がある。南北塀SA4007、東西塀SA4008はSB4002を区画する塀である。柱間はともに2.7m(9尺)間だが、ややバラツキがある。SA4007は5間分を検出した。この塀はSB4002の妻柱から約5.5mの位置にある。SA4008は3間分検出し、SB4002の北3mの位置にある。この二条の塀は鍵の手状にSB4002を区画するが、隅の部分が閉塞せず3.8m空く。ここが通路となっていたのであろう。

SA4007の西3.6m(10.2尺)にSB4003がある。梁間2間、桁行は1間分を検出した。総柱建物の可能性がある。柱間は2.3m(7.6尺)等間である。

C期 南北棟建物SB4004と南北塀SA4010がある。SB4004は東側柱のみ4間分を検出した。柱間は1.4mから2.1mまで不等である。SA4010は、SB4004の東5.4m(18尺)にある2間の塀で、柱間は2.7m(9尺)等間である。これ

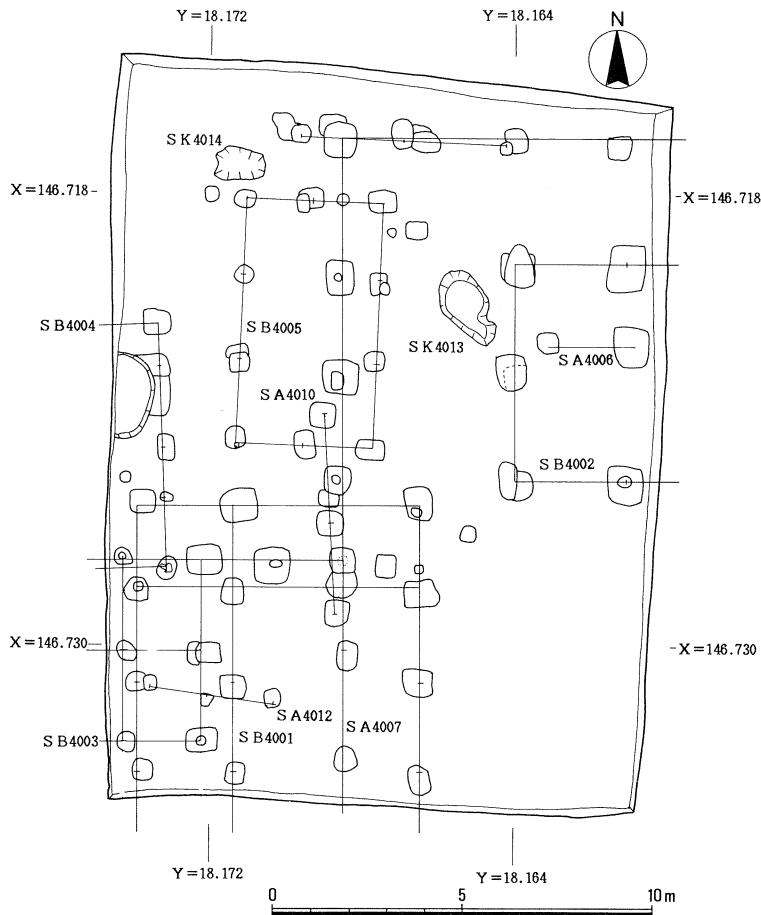


図14 第183-1次
遺構配置図

らの遺構の方位は、北で西に、SB4004が約4度30分、SA4010が2度30分振れる。

D期 南北棟建物SB4005と東西塀SA4011・4012がある。C期とは逆に、主軸の方向が北で東に約2度20分振れる。SB4005は3間2間の建物で、柱間は桁行が2.3m（7.6尺）等間、梁間が1.8m（6尺）間である。柱は抜き取っているが、一部に一辺10cmの角柱が残存していた。SB4005の北1.7mに東西塀SA4011がある。3間分を検出した。柱間は3m（10尺）であるが、柱掘形は小規模である。SA4012はSB4005の南にある東西塀で、2間分を検出した。柱間は1.6m（5.3尺）である。

以上の遺構の年代を決める遺物はほとんど出土せず、建物の軸線の振れなどから、A期を奈良時代前半、B期を奈良時代後半、C・D期を奈良時代末から平安時代初頭と推定する。瓦器などの出土はなく、D期が中世に降る可能性は少ない。

2 右京一条二坊六坪の調査 第183-14次

マンション建設に伴う事前調査である。発掘調査地は、右京一条二坊六坪にあたり、二坊坊間路が敷地の西端に予想された。マンション建設予定位置を中心に、敷地の南寄りにトレンチを設定した。調査総面積は180㎡で、調査期間は、昭和62年10月2日から15日までである。

発掘区の層序は、約1mの盛土を除去すると、上から耕土、床土、黒茶灰褐粘質砂土（遺物包含層）、地山の順である。地山は、基本的に黒灰粘土であるが、ところにより黄灰色を呈する。秋篠川による層位の乱れはなかった。遺物包含層は平均5～10cm程度の堆積で、これを除去した地山面上で遺構検出した。

検出した主な遺構は、掘立柱建物5、塀1、溝7、土壇10、道路1である。調査面積が狭く、建物や塀の全体の規模は確かめられなかった。塀SAは、2間分しか検出していないが、坊間路に並行するので、あるいは六坪の西限を画する施設と関連するかも知れない。SD811、SD812は、それぞれ坊間路SF813の東西両側溝で、第142次調査で検出した溝の南延長上に正確に位置する。SD811は、幅1.0m、深さ0.3m、SD812は、幅1.2m、深さ0.1mである。両側溝間中心距離は8.5m、路面幅は7.3mである。

遺物は、坊間路両側溝を中心に出土し、土師器、須恵器などの土器類のほか、軒瓦6点を含む少量の瓦、塼、和同開珎、刀装金具、鉄鏃などがある。軒瓦の型式は、6135B、6225B、6664、6733Aがある。

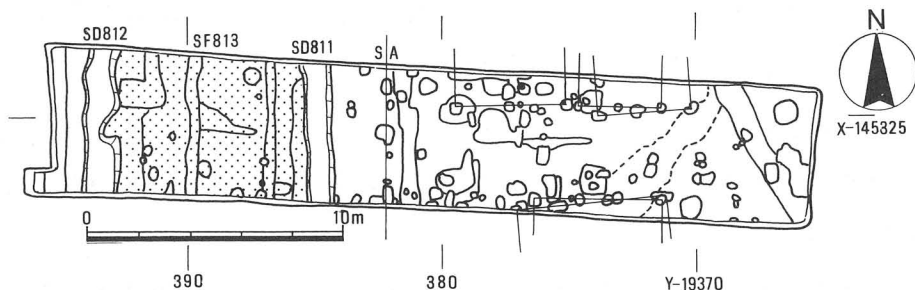


図15 左京一条二坊六坪と二坊坊間路遺構図

3 右京二条三坊一坪の調査 第183 - 18次

この調査は、奈良市西大寺南町2384番地において実施した、集合住宅建設に伴う事前調査である。調査地は現在の西大寺東門の南方約260m、現在の西大寺東端を南下する道路と東西方向に流れる小川との交差点の北東にあたり、平城京の条坊復元では、右京二条三坊一坪の西辺にあたる。調査区は東西25m、南北17m（面積425㎡）の範囲を設定した。

調査区は全体に0.7～0.8mの盛土（現代）があり、その下は水田耕土、薄い灰褐色粘質砂土層、床土、暗灰色粘質土と続き、北部では黄褐混青灰色粘土（北東部では黒色粘土がこの上にのる）、南部では流路跡と見られる灰色粗砂がこの下にくる。遺構面は黄褐混青灰色粘土または黒色粘土の上面である。

遺構と遺物

調査の結果、調査区の南半部は、流路跡と見られる砂の堆積層（4層）であった。この流路跡は、現在調査区の南の道を隔てた所を西から東へ流れる小川がかつて幅広かったか、あるいは北に位置していた時のものである可能性が高い。また、調査区北半部西端ではこの流路跡にとりつくかたちで南北方向に砂の堆積層がのびており、これもまた流路跡であろう。

上記のような状況のため、発掘調査区の南半部は、この流路が流路以前の遺構を壊して、皆無である。検出した遺構は調査区の北半部のみである。検出遺構は奈良時代のものと見られる堀立柱建物1棟（SB2101）、塀1条（SA2102）、土壇1基（SK2103）で、このほか多数の小土壇や後世の耕作溝が見られた。また、古墳時代の遺物を含む自然流路跡（黒色粘土）が調査区の北東部に見られた。さらに、条坊復元によると調査区西端付近に予想される、一坪と八坪との坪境小路東側溝については、明確には検出されなかったものの、南半部東西方向の流路跡にとりつく南北方向流路跡がこれを踏襲している可能性はある。

なお、この調査区の北東部で昭和58年10月に奈良市が実施した発掘調査では奈良時代及び中世の井戸が各1基検出されているが、今回の調査ではこれに関連すると見られる明らかな遺構はなかった。

遺物は、土器、瓦類ともに少なく、一括して遺物が見られたのは、奈良時代前期の土師器、須恵器が出土した土壌（SK 2103）のみである。

まとめ

今回の調査の結果をまとめると以下のとおりである。

- 1 今回の調査区の南半部は流路跡であるが、この位置に流路が存在した時期は（古墳時代の自然流路を切っていることから）古墳時代までは上がりず、下限は不明である。
- 2 今回の調査区の西端付近に予想された右京二条三坊一坪との坪境小路東側溝は明確には検出されなかったが、予想位置付近で検出された流路跡がこれを踏襲している可能性はある。
- 3 今回の調査区の北東部で行なわれた調査で検出された同一坪内の井戸と関連すると見られる明らかな遺構はなかった。

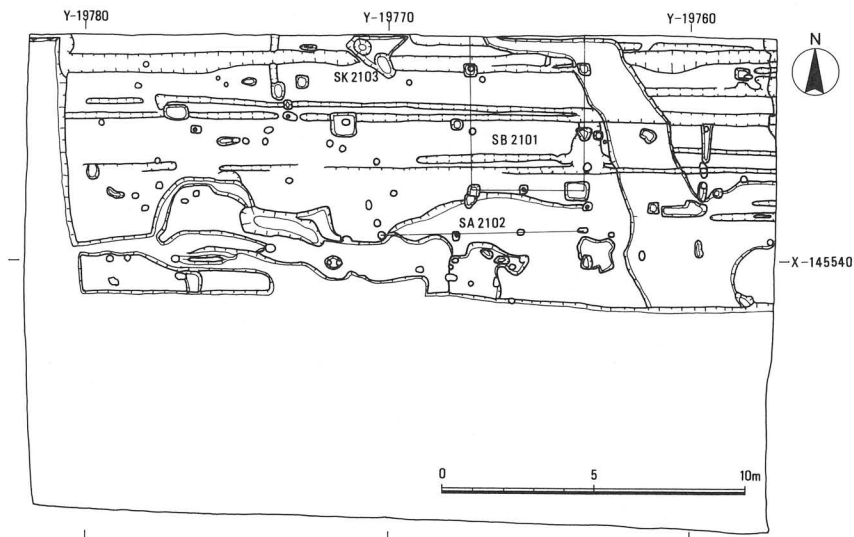


図16 第183-18次遺構配置図

4 阿弥陀浄土院跡の調査 第183-21次

住宅新築に伴う事前調査である。調査地は法華寺阿弥陀浄土院跡に考えられている平城京左京二条二坊十坪の東北部にあたる。阿弥陀浄土院跡の発掘調査は、1972年に本調査地の西70mの地で行われている（第80次調査、調査面積960㎡）。ここでは3時期に区分できる遺構を検出し、このうち奈良時代後期の阿弥陀浄土院に伴う遺構として、僧房ないし雑舎と考えられる掘立柱建物3棟などを検出した（『年報1973』）。また、本調査地から西南50mの水田中には阿弥陀浄土院の庭石と伝承される立石が残存する。

遺構面は、旧水田耕作土上面から40cm程下がった軟弱な暗灰色粘土（地山、標高約60.8m）である。遺構は疎らであり、建物としてまとまるものは1棟にすぎない。他は土壇4ヶ所、柱穴状のピット2ヶ所などがあるが、遺構に伴う遺物がほとんどなく、その性格は不詳である。SB4040は、東西棟建物の東妻部にあたると考えられる。桁行二間以上、梁間2間の掘立柱建物であり、柱間寸法は梁間1.8m（6尺）等間、桁行2.4m（8尺）等間である。柱掘形は一辺約70cmの隅丸方形で、すでに遺構面自体が削平を受けているのか、穴の深さは30cmと浅い。柱掘形からの遺物がなく、年代を決定しえないが、掘形の形態・柱間寸法等から

奈良時代の遺物であることは問題ないにしても、阿弥陀浄土院との関係などは全くわからない。

1972年の調査、今回の調査とも阿弥陀浄土院推定地の北辺部であり、立石を含む水田等阿弥陀浄土院伽藍・園池中枢部の調査に期待するところ大である。

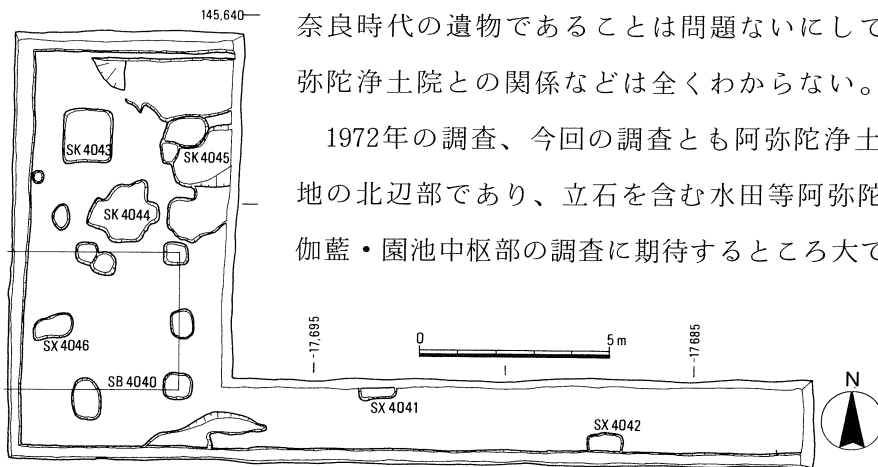


図17 第183-21次遺構配置図

5 左京三条二坊一・二・七・八坪の調査 第184次・186次

1 はじめに

平城京左京三条二坊一・二・七・八坪にまたがる約40,000㎡の場所に、そごうデパートが建設されることになり、このうち30,000㎡を、2年半の計画で1986年9月30日以来、継続的に発掘調査を実施している。1988年3月末までの調査面積は、あわせて13,700㎡あり、1986年度に第178次調査として行なった南側6,900㎡の成果については、すでに概要を報告した（『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』）。1987年度は、第178次調査区の北側に第184次、その西側に第186次調査区を設定して調査をすすめたが、第186次調査は1988年4月現在継続中であるので、ここでは1988年3月末までの成果をもとに、調査区の間を東西に通じている市道を境にして、南区・北区と仮りに呼ぶことにする。なお遺構の性格の評価や時期区分については、まだ十分な整理分析作業がすすんでいないので、以下の記述は現時点における暫定的な試案であること、および1988年度末までに発掘調査が終了ししだい、報告書を刊行する予定で、検出遺構や出土遺物に関する説明は概要にとどめておくことを、あらかじめことわっておきたい。

2 調査の成果

これまでの調査で、左京三条二坊七坪のほぼ全域を発掘し、一・二・八坪についても一部の様子が明らかになった。占地状況をみると、奈良時代の初めから前半期を通じて一・二・七・八坪の4坪（町）を一体として利用していた宅地であったことがわかり、しかも北区の東端近くの土壌から出土した木簡により、この場所が、奈良時代の初めに政府の中枢部にいて権勢をふるい、悲劇的な死をとげた長屋王の邸宅跡である可能性が強くなった。奈良時代中頃になると、各坪の間に坪境小路がつくられて1町以下の宅地となる。奈良時代後半のある時期に小路が埋められて、再び2町あるいは4町占地の広大な宅地となるが、奈良時代の終りに近い頃、また小路が通じて宅地は分割され、小規模な建物が散在していた様子が明らかになっている。

3 建物配置の変遷

1988年3月末までに確認した遺構は、掘立柱建物117棟以上、掘立柱塀40条以上、井戸24基、溝35条以上、坪境小路2条など、多数にのぼる。これらはいずれも奈良時代から平安時代の初めにかけての時期のものであり、遺構の重複関係や配置状況などを考えると、大きくA～Dの4時期に分けることができる。以下の記述では、各時期ごとに、遺構の配置を概観し、主要な遺構について説明する。

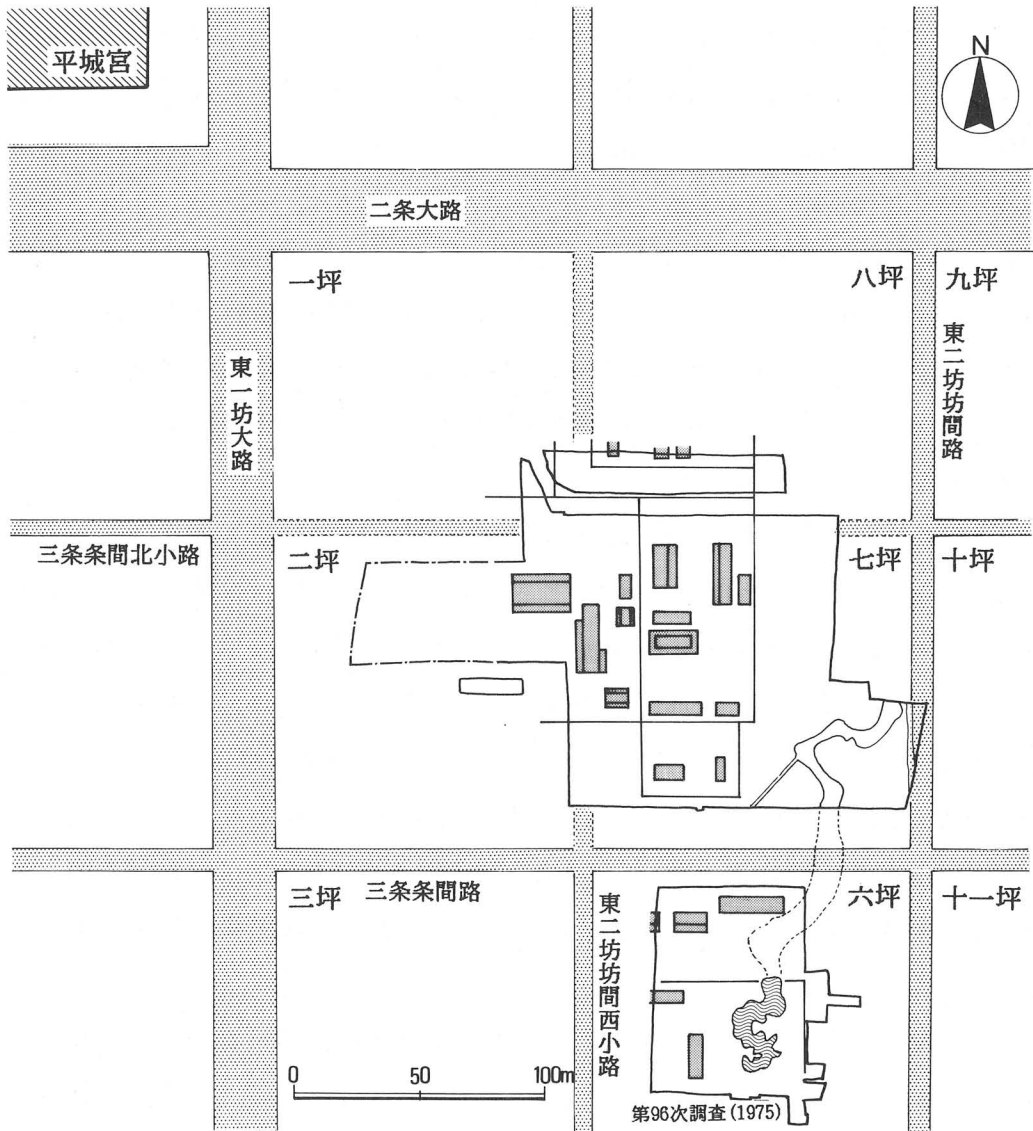


図18 左京三条二坊一・二・七・八坪 (1 : 3000)

A 期

奈良時代前半である。各坪の間の坪境小路がなく、4坪（町）を一つの敷地として利用していた時期である。長大な塀で敷地の中を東西・南北に区画し、内部に大規模な建物を中心にして多くの建物を配置している。A期は遺構の配置関係によって、さらにA1～A3の時期に細分される。

A1期 奈良時代初頭の、平城京遷都に伴う造営に関わると考えられる時期である。4坪の広さの宅地の中央やや南寄りの位置に建つ掘立柱東西棟SB210を主殿とし、東の脇殿として南北棟SB160を、さらにその東側に大規模な南北棟SB150を配置する。また主殿SB210の南には、60mをへだてた位置に、南北に庇が付く東西棟SB058がある。

敷地内を区画する施設は、西限と北限が不明であるが、南限の掘立柱塀SA040は主殿の南80mのところであり、東限の塀SA030はSB210の東65mにある。これらの塀によって、東西80m以上、南北110m以上の広い範囲が囲まれている。北区では調査区の西端に南北塀SA200があり、これは東西塀SA201とL字形あるいはT字形に接続するものとみられる。

主殿SB210は桁行7間、梁間5間の南北庇の付く掘立柱建物である。桁行の柱間寸法は、中の5間が10尺（1尺＝約29.6cm）等間、両端間が各14尺、梁間は10尺等間である。建物規模は桁行総長78尺（23.1m）、梁間総長50尺（14.8m）という大規模なもので、建坪にして341.88㎡・約103.6坪あり、これまでに調査された平城京内の宅地のどの建物よりも大きい。身舎の梁間が3間であることも合わせて、SB210がかなり格式の高い建物であったことを示している。桁行の両端間は14尺（4.2m）と、中の5間に比べると著しく広くつくられている。なお身舎の内側に東柱の柱穴（床束）があるので、SB210は床張の建物であったことが知られる。

東の脇殿SB160は桁行9間、梁間2間で、柱間寸法は10尺等間。東西に庇が付く。内部に2列の床束があり、3間ごとの床束の柱穴が大きく、側柱に近接した場所にあるので、ここに間仕切りがあったと考えられる。西庇は南から7間分、

東庇は南から3間分しかなく、変則的な様相をみせている。南北棟SB150は、北妻が主殿SB210の北側柱通りに、南妻がSB160の南妻に一致している。桁行は13間で10尺等間、総長130尺(約38.5m)という長大な建物である。

A2期 建物群が最も整然と配置される時期である。主殿SB210、東脇殿SB160は前の時期から存続するが、SB150をはじめ、いくつかの建物や区画塀が取り壊されて、SB160の東方に四面庇の付く大きな東西棟SB100と、その北に接してSB101がつくられる。主殿SB210、SB160などの西側の建物群と、SB100・101・071・125・143などの東側の建物群の間は南北塀SA095で仕切られる。この二つの建物群全体は、南をSA170、東をSA120で区画される。このうち東限の区画塀SA120の位置は、七坪における条坊計画上の東西の中心線に一致する。区画の北側は、東西塀SA201が、北区と南区の間の未調査部分に伸びるものと推定される。また北区で検出した東西塀SA190はこの時期に伴うもので、柱間寸法9尺等間、全長23間(約63m)あり、西端で、北にのびる南北塀SA191に接続する。いっぽうSB100などの建物群の区画の南辺には、塀SA030・031・032で囲まれる東西38m南北30mの区画がもうけられ、中に東西棟SB038、南北棟SB027がつくられる。

このようにA2期は4坪(町)分の敷地が、掘立柱塀で、少なくとも5つの大きな区画にわけられている。なお東限の区画塀の東(外)側では建物遺構がまったくみとめられず、東方に通じる東二坊坊間路(SF002)までの、約60m幅のかなり広い土地の利用状況がどのようなようであったか、究明する必要がある。

東側の建物群の中心的存在である東西棟SB100は、身舎の桁行6間、梁間2間、柱間寸法が8尺等間で四面に庇が付く、格式の高い建物である。棟通りに束柱をもつので、床張りであったと推定できる。このSB100の北には、8尺の間隔において、桁行6間、梁間2間の一まわり小さな東西棟SB101がならぶ。これも床張りで、SB100と柱筋をそろえているので、SB100と101は、連結した構造をとる双堂型式の建物であったと考えられる。

A3期 主殿SB210をはじめ主要な建物はA2期から存続するが、東群の双堂

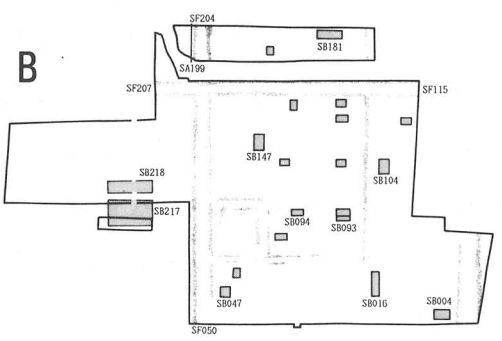
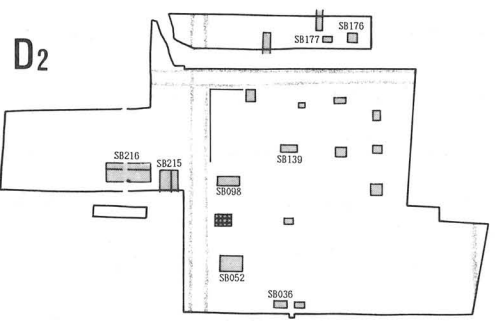
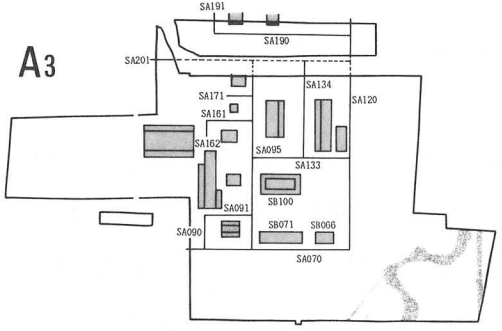
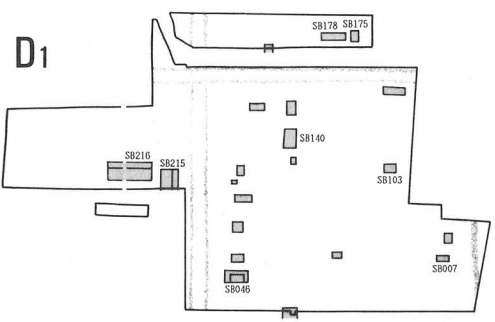
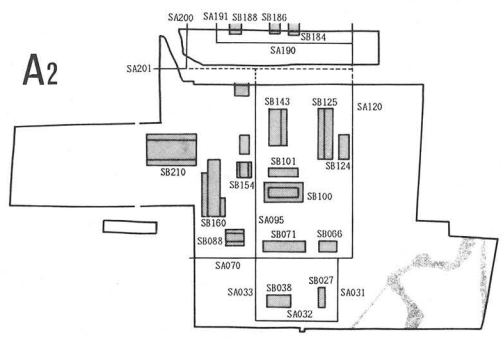
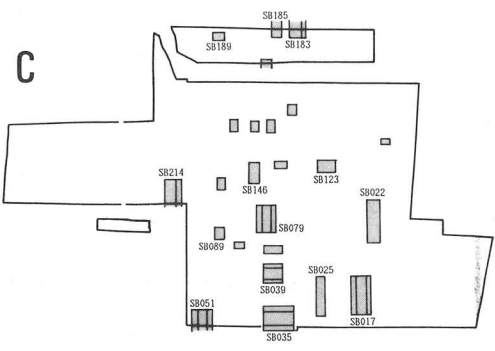
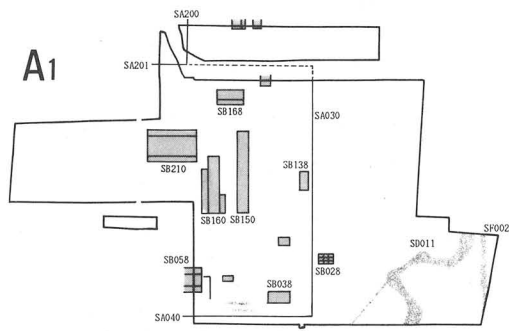


図20 遺構変遷図

表3 時期別主要掘立柱建物と塀

柱間数 (桁行×梁間)		柱間寸法	存続期間	柱間数 (桁行×梁間)	柱間寸法
A ₁ 期				B 期	
S B 028	3×3	東西棟・総柱	桁行8尺・梁間6尺等間	S B 004	5×2 東西棟 桁行7尺・梁間8尺等間
S B 038	4×2	東西棟	10尺等間	S B 016	5×2 南北棟 桁行8尺・梁間6.5尺等間
S B 058	？×4	東西棟・南北庇	10尺等間	S B 047	3×2 南北棟 桁行6尺・梁間8.5尺等間
S B 138	4×2	南北棟	8尺等間	S B 093	3×3 東西棟・南庇 桁行8尺・梁間6尺等間
S B 150	13×2	南北棟	10尺等間	S B 094	3×2 東西棟 桁行7尺・梁間5.5尺等間
S B 160	9×2	南北棟・東西庇	10尺等間	S B 104	4×3 南北棟・東庇 桁行6尺・梁間6尺等間
S B 168	5×2	東西棟・南庇	9尺等間	S B 147	3×2 南北棟 桁行8.5尺・梁間9尺等間
S B 210	7×5	東西棟・南北庇	中央5間10尺等間 両端間14尺	S B 181	5×2 東西棟 8尺等間
S A 030	10間分検出	南北塀	9尺等間	S A 199	4間分 南北塀 10尺等間
S A 040	14間分検出	東西塀	東7間18尺等間 西7間9尺等間	S B 217	未確定 東西棟
S A 200	4間分検出	南北塀	9尺等間	S B 218	未確定 東西棟
S A 201	4間分検出	東西塀	9尺等間	C 期	
A ₂ 期				S B 017	7×4 南北棟・東西庇 桁行9尺・梁間8尺等間
S B 027	5×2	南北棟	桁行5.5尺・梁間6尺等間	S B 022	7×2 南北棟 桁行10尺・梁間11尺等間
S B 066	3×2	東西棟	10尺等間	S B 025	7×2 南北棟 桁行9尺・梁間7尺等間
S B 071	7×2	東西棟	10尺等間	S B 035	5×4 東西棟・南北庇 10尺等間
S B 088	4×4	東西棟・南北庇	桁行7.7尺・梁行6.5尺等間	S B 051	？×2 南北棟・東西庇 桁行9尺・梁間8尺等間
S B 100	8×4	東西棟・四面庇	8尺等間	S B 039	4×4 東西棟・南北庇 8尺等間
S B 101	6×2	東西棟	8尺等間	S B 079	5×4 南北棟・東西庇 9尺等間
S B 124	4×2	南北棟	桁行10尺・梁間9尺等間	S B 089	3×2 南北棟 桁行7尺・梁間2.25m~2.35m
S B 125	9×3	南北棟・西庇	桁行9尺・梁間8尺等間	S B 123	4×2 東西棟 桁行7.5尺・梁間6尺等間
S B 143	6×3	南北棟・東庇	桁行9.5尺・梁間10尺等間	S B 146	5×2 南北棟 桁行7尺・梁間8.5尺等間
S B 154	3×4	南北棟・東西庇	桁行9尺・梁間7尺等間	S B 183	？×3 南北棟・東庇 桁行7尺・梁間9尺等間
S B 184	？×2	南北棟	梁間8尺	S B 185	？×2 南北棟・東庇 桁行8尺・梁間7尺等間
S B 186	？×2	南北棟	梁間10尺	S B 189	3×2 東西棟 桁行6尺・梁間7尺等間
S B 188	？×2	南北棟	梁間6尺	S B 214	3×？ 南北棟・東庇 9尺等間
S A 031	全長10間	南北塀	10尺等間	D ₁ 期	
S A 032	全長13間	東西塀	10尺等間	S B 007	3×2 東西棟 1.5~2.8m
S A 033	全長10間	南北塀	10尺等間	S B 046	5×3 東西棟・三面庇 桁行7尺・梁間6.5尺等間
S A 070	28間分検出	東西塀	9尺等間	S B 103	？×2 東西棟 桁行7尺・梁間6.5尺等間
S A 095	30間分検出	南北塀	10尺等間	S B 140	3×2 南北棟 桁行10尺・梁間9尺等間
S A 120	29間分検出	南北塀	9尺等間	S B 175	2×2 南北棟 桁行9尺・梁間7尺等間
S A 190	全長23間	東西塀	9尺等間	S B 178	3×2 東西棟 5尺等間
S A 191	2間分検出	南北塀	9尺等間	S B 215	？×3 南北棟・東庇 9尺等間
A ₃ 期				S B 216	未確定 東西棟
S A 090	全長6間	南北塀	9尺等間	D ₂ 期	
S A 091	全長9間	東西塀	8尺等間	S B 036	3×2 東西棟 桁行7尺・梁間6尺等間
S A 133	全長17間	東西塀	9尺等間	S B 052	4×3 東西棟・南庇 9尺等間
S A 134	13間分検出	南北塀	9尺等間	S B 098	5×2 東西棟 桁行7尺・梁間8.5尺等間
S A 161	全長9間	東西塀	7.5尺等間	S B 139	3×2 東西棟 桁行6.5尺・梁間7尺等間
S A 162	全長3間	南北塀	7.5尺等間	S B 176	3×2 東西棟 桁行6.5尺・梁間5.5尺等間
S A 171	全長3間	東西塀	8尺等間	S B 177	6×2 東西棟・西庇 桁行7尺・梁間6尺等間

型式の建物のうち北側のSB101を撤去してそこに東西塀をつくるなど、前期の塀による区画をさらに小さく分割して、建物を2～3棟ずつ囲いこむ。A2期に南側にあった塀SA030・031・032による区画もこの時期にはなくなり、北区の西端の南北塀SA200も撤去されたとみられる。このようにA3期はA2期に比較すると、区画割りに著しい変化がみられる。

B 期

奈良時代中頃にあたる。各坪の間には条坊計画線上に坪境小路がつくられ、1町（以下）の宅地となり、七・八坪内には比較的小規模な掘立柱建物が散在する。

東西道路SF115は七坪と八坪の坪境をとおる三条条間北小路で、南側溝SD113、北側溝SD114はそれぞれ新旧2時期の重なり（つくり替え）がみられ、そのうちの下層の溝がB期に属する。側溝心心間で測った道路の幅は場所によって違いがあり、4.5～6.0mである。ただしSF115の西への延長部分にあたる、一・二坪の坪境小路SF207では、南・北側溝（SD208・206）とも重複はみとめられず、側溝心心間距離は、ほぼ6mである。

北区で検出した南北道路SF204は、一・八坪間を通る東二坊坊間西小路である。東・西側溝（SD202・203）は、いずれも深さ10cmほどと浅くしか遺存していないが、側溝心心間距離は約7mある。

B期の当初の造営に関わると思われるものに鍛冶炉遺構SX167がある。A期の南北棟SB160の西北隅柱穴の柱抜き取り穴を利用するような形で作られているので、A期の建物群を取り壊してB期の造営を行なっている時点で営まれたものとみられる。埋土には大量の木炭が入る。南側が浅く、焚き口と推定され、北にむかってなだらかに深くなる。壁面は堅く焼けている。東の壁面にはフイゴの羽口が土製の台とともに原位置をとどめていた。

二坪は、おそらく1坪（町）占地の宅地と考えられ、坪内の東寄りに桁行7間の大規模な東西棟建物が2棟（SB217・218）、南北に並んでいる。

C 期

奈良時代後半にあたる時期である。二・七坪の坪境小路の側溝が埋め立てられ、

再び広大な敷地となる。一・二坪および一・八、七・八坪境小路が同様に廃絶されるかどうかについては確証が得られていないが、A期と同じ4坪（町）占地であった可能性が強い。C期の建物のなかには、SB017・035・039・051・079などのように、両庇をもつ建物が多い。C期の中心的建物は、南区の西側で、現在調査中の地区にあると想定される。

D 期

奈良時代末～平安時代初頭にあたる。坪境の小路を再びつくり、1坪（町）以下の敷地となる。七・八坪ではD1、D2の小期にわかれ、いずれの時期にも坪内に小規模な建物が散在するが、各坪内をさらに細分する区画施設は検出していない。二坪は、1坪（町）占地の宅地と予測される。坪内の東寄りに北庇をもつ桁行7間の東西棟建物があり、そのすぐ東に、東庇のつく南北棟建物が脇殿風に配置されている。

D期以降の遺構、遺物はほとんどなく、この遺跡は、平城京の廃都後まもなく人々の居住地ではなくなったようだ。

3 井戸について

井戸跡は南区で9か所、北区で1か所検出した。井戸の規模や構造については表に示すにとどめ、二・三の興味深い点を報告しておくことにする。南区南東寄りで検出したSE117は、内法一辺110cmの横板を組んだ方形の井戸である。最下段の井戸枠だけ残り、それより上の部分は抜き取られていた。廃絶の時期は奈良時代の前半、おそらく725年を前後する頃と推定される。井戸枠を抜き取ったあとの穴を埋めた土の中から、後述するように、猿などを描いた土師器の皿が出土した。

北区東寄りで検出したSE116は、奈良時代末に廃絶された、縦板組み横棧どめの方形の井戸である。井戸の掘形の中、井戸枠のすぐ外側に接した2か所に斎串が埋められており、また1か所には小形の素文鏡が埋っていた。いずれも井戸築造時の呪術祭祀に伴う遺物と考えられる。

北区東寄りで検出したSE180は、長方形の平面を呈する南北1.9m、東西2.3

表4 井戸の構造と規模（単位はcm）

遺構番号	井戸枠の構造	規 模	掘形の規模		廃絶時期
			(N S × E W	深さ)	
S E 068	上段—縦板組み横棧どめ・方形 下段—円形曲物3段積み重ね	100 61・61・42	380 × 360 (不整形円形)	270	奈良時代後半
S E 110	上段—縦板組み隅柱横棧どめ・方形 下段—円形曲物3段積み重ね	60 64・60・56	165 × 170 (円形)	164	奈良時代後半
S E 116	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	85	205 × 202 (円形)	176	奈良時代末期
S E 117	横板井籠組み・方形 (最下段だけ遺存)	110	297 × 274 (方形)	191	725年頃
S E 126	縦板組み隅柱横棧どめ・方形	72	125 × 150 (円形)	140	奈良時代末期
S E 130	上段—縦板組み・方形 下段—円形曲物2段積み重ね	? 60	153 × 170 (円形)	155	?
S E 163	上段—縦板組み・円形 下段—円形曲物3段積み重ね	59 57・54・54	直径 152 (円形)	152	奈良時代末期
S E 164	井戸枠はすべて抜き取られている	—	直径 232 (円形)	179	?
S E 180	井戸枠はすべて抜き取られている	—	190 × 230 (方形)	200	725年頃
S E 211	横板井籠組み・方形 (13段遺存)	135	520 × 507	352	平安時代初頭

m、深さ2mの土壌であり、井戸枠が抜き取られたあとの穴、あるいは掘形を掘削したものの、井戸枠を設置しないままに埋め戻した穴とみられる。最上層の砂質土層と粘土層の下に木簡を含む木屑層があり、さらに下層には数層の粘土層が堆積する。遺物はおもに砂質土層と木屑層から出土した。木屑層から出土した木簡の年紀により、この土壌は養老元年（717）を大きく下らない頃に埋められたことがわかる。この年代は、伴出した土器が示す時期（平城宮土器Ⅱ・725年前後）とも一致し、遺構変遷との関係ではA1期の終わりからA2期の初めの頃にあたるものと考えている。

SE211はA期の主殿SB210と同位置で検出した井戸跡で、一辺約5mの大きな掘形の中に、井戸枠が抜き取られずに遺存していた。井戸枠は内法一辺が135cmの横板を方形に組んで積み上げたもので、底から13段分が残り、井戸底の深さは、遺構検出面から340cmある。枠内には堆積したヘドロ状の泥土の中から瓦や土器、

齋串などの木製品、それに一頭分の馬骨などが出土した。土器は平安時代初頭に属する。井戸底に溜った堅くしまった砂層の中からは、和同開珎23点・万年通宝3点・神功開宝12点の3種の銅銭が散在した状態で出土した。いっぽう掘形の埋土からは多くの瓦片に混って平城宮土器Ⅲ（750年前後）の土器片が出土している。

4 出土遺物

坪境小路の側溝や井戸をはじめとして、多くの遺物が出土した。土器・土製品や瓦埴類に比べると木製品、金属製品は少ないが、すでに記述した齋串や銅銭のほかにも、いくつかの井戸からも齋串や円形曲物などが出土し、七・八坪境の三条条間北小路SF115の北側溝SD114からは木製人形が出土している。SF115の路面上で検出した直径35cmほどの浅い土壌の中に、100枚近くの和同開珎が埋められていた。これは左京四条四坊九坪にも例があり、「差し銭」の性格をもつものとして興味深い。また一・二坪の坪境小路SF207の路面上で検出した土壌SK209からは小型の素文鏡が出土している。

土器・土製品

坪境小路をはじめとして、調査区全域から大量に出土した。ほとんどが土師器、須恵器であるが、二彩・三彩・灰釉の施釉陶器、硯、土馬、ミニチュア土器、フイゴの羽口などの土製品、および少量の古墳時代の土師器がある。また、「水」、「左」、「天」、「山」、「金」などの文字を記した墨書土器や、猿を描いた墨画土器も出土した。猿の墨画土器については後述する。

多量の土器のうち、井戸跡SE180から「長屋皇宮……」や養老元年（717）の木簡などと伴出した土器を図示した。土師器、須恵器ともに保存状態が良好で、平城宮土器Ⅱの一括資料である。土師器には杯A（4～8）、杯B（2・3）、杯B蓋（1）、杯C（16～18）、杯E（9）、皿A（14・15）、皿B（13）、皿B蓋（22）、椀C（10・11）、鍋（26）、甕（25・27）がある。杯・皿にはa手法、b手法の調整があり、内面に螺旋+放射二段や螺旋+放射+連弧の暗文をもつものが多い。14・16は底部に線刻があり、7・9は灯火器として使用された形跡が残る。須恵器は、杯A（19・21）、杯B（20）、皿B（23・24）、皿B蓋（22）、鉢

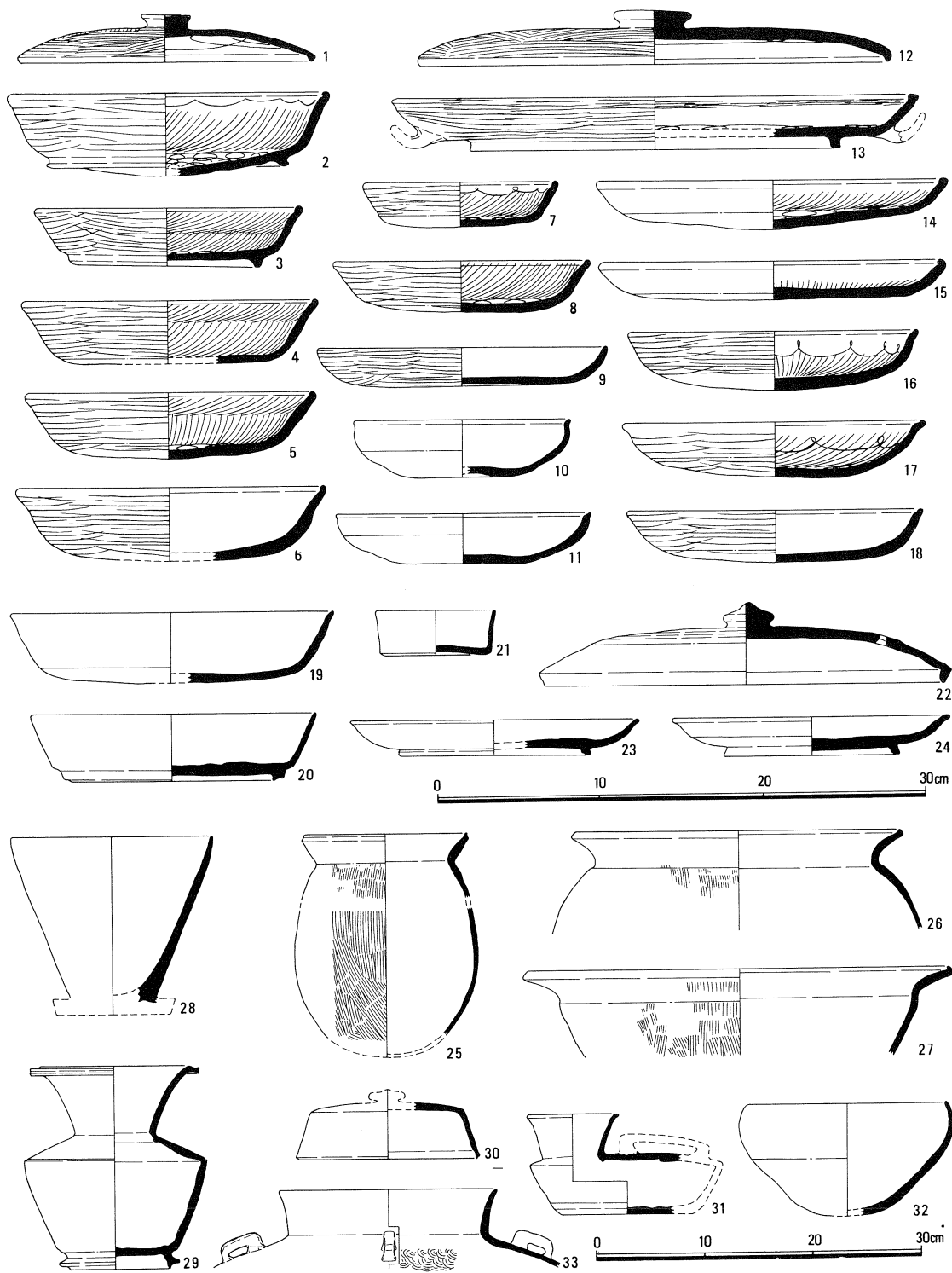


图21 SE180出土土器（1：4）

A (32)、鉢F (28)、壺A蓋 (30)、壺Q (29)、甕 (30)、平瓶 (31) がある。土師器にくらべると、器種、数量ともに少ない。なお、古墳時代の土師器は、その時期に相当する遺構がなく、周辺からの流れ込みと考えられる。

SE117出土の墨画土器は、口径が21.2cm、器高が2.1cmあり土師器皿A I に分類されるもので、平城宮土器Ⅱ (725年前後) に位置付けられる。底部外面に猿の顔が5匹分、墨で描かれており、そのうちの一匹は手、足を含めて全身が流麗なタッチで描写されている。そのほかに筆ならしの跡とみられる数条の墨線や、「船連縣麻呂」などの文字も書かれている。このことからこの土師器皿は硯の下皿ないしは蓋として使われていたものと考えられる。また底部内面にも枝と葉をあしらった樹木が描かれ、犬の顔ともみてとれる墨画もある。

この墨画は、土器の年代を下らない時期に、絵画の技術をもつ人によって、出土地付近で描かれた可能性が強い。数匹の猿の表現をみると、最初に眼の部分だ



図22 SE117出土

墨画土器 (1 : 2)

けをためし書きし、段階的に描写範囲を広げていった過程を追うことができるので、正式な絵をかくための下書きとして、手近かにあった土器の表面を利用したとも想像することができる。猿などの墨画（戯画）の例としては、唐招提寺金堂（天平宝字3年—759—建立）の梵天像（製作年代については天平宝字年間説から平安時代初期説まで諸説がある）の台座の反花に描かれたものがあるが、今回出土した墨画の年代はそれよりも少なくとも30～40年は古い。これは法隆寺金堂の天井に描かれたイノシシなどの墨画以降の空白期を埋める、美術史上貴重な資料といえよう。（*墨画に関しては、西川杏太郎館長、河原由雄仏教美術研究室長をはじめ奈良国立博物館の諸氏のご教示をいただいた。）

瓦埴類

北区・南区からはかなり多くの瓦が出土しており、1988年3月末時点で、軒丸瓦227点、軒平瓦261点にのぼる。軒瓦編年の時期ごとの点数は表5に掲げたが、出土軒瓦の傾向をみると、I期（708～721）の瓦では、表で「藤原宮式」としたうちの6272—6644型式の組み合わせがもっとも多い。この瓦は藤原宮式の文様をもっているが、藤原宮での出土が確認されていない。平城I期の軒瓦では、6284—6664がある。

II期（721～745）には、6135—6188の組み合わせがもっとも多く、次いで6308—6663A・B、6311—6664D・F、6285—6667、小型の軒瓦6313—6685、6314—6666の2組がある。178次調査区で出土の目だった6285—6685のセットは、今回はやや少ない。

III期（745～750頃）は出土点数がもっとも多い。6225—6663C、6282—6721の組み合わせがその大半を占める。なかでも6282—6721が多いが、6282・6721とも特定の種類に限定されるわけではない。III期の軒平瓦では6691Aも多いが、法

表5 軒瓦時期別出土点数

軒丸瓦	184次	186次	合計	軒平瓦	184次	186次	合計	総計
藤原宮	17	9	26	藤原宮	22	8	30	56
I期	7	1	8	I期	17	7	24	32
II期	35	25	60	II期	45	26	71	131
III期	55	23	78	III期	74	31	105	183
IV期				IV期	3	2	5	5
不明	32	23	55	不明	17	9	26	81
合計	146	81	227		178	83	261	488

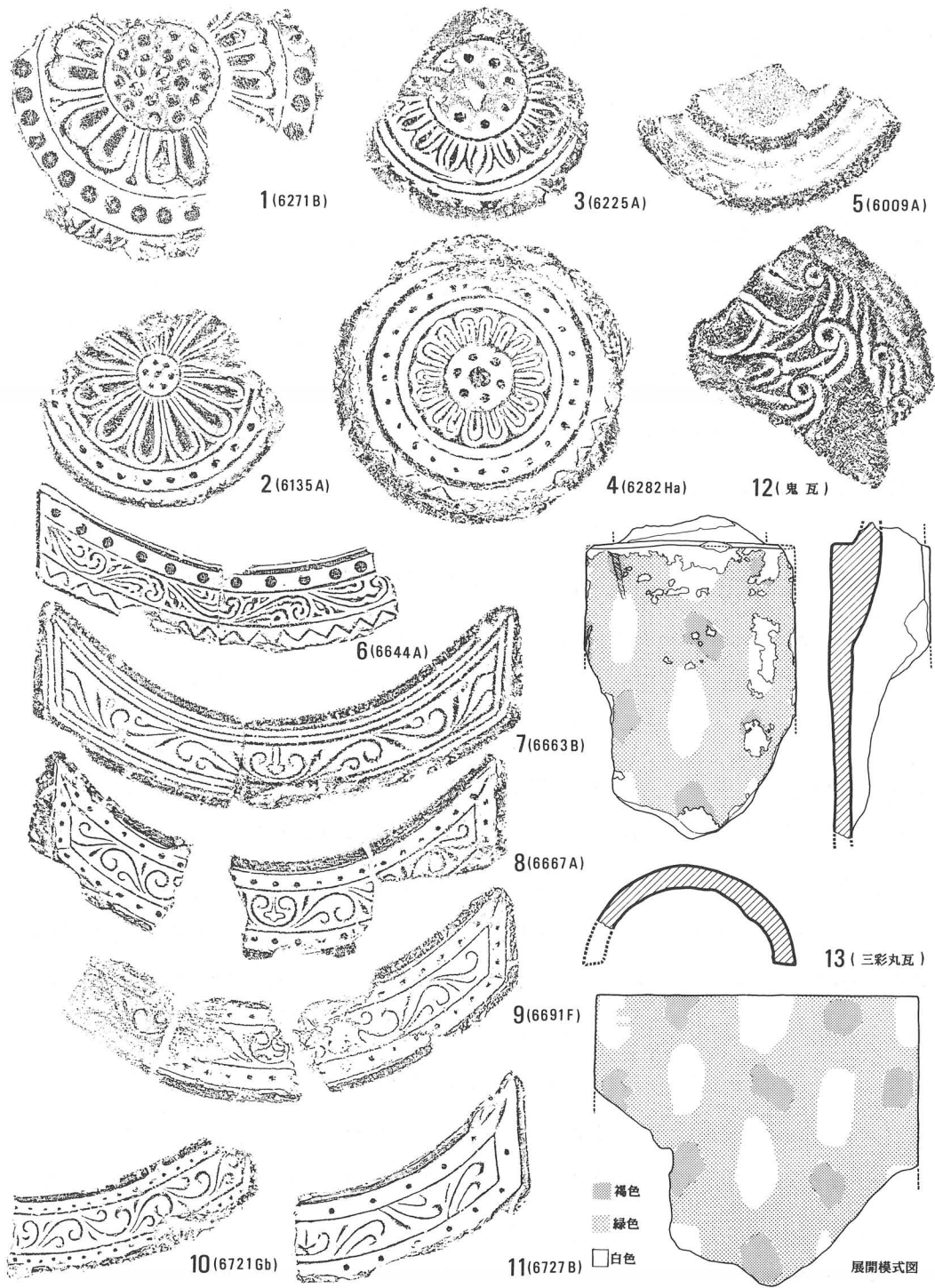


图23 第184・186次出土瓦 (1 : 4)

隆寺東院で組み合う軒丸瓦6285Ba、恭仁宮で組み合う軒丸瓦6320Aa、平城宮第二次大極殿閣門で組み合う軒丸瓦6296Aのうちでは、6320Abが1点出土したにとどまり、今回の調査区での組み合わせは不明である。

以上の出土軒瓦は、I期の6272—6644、II期の6285—6667を除けば、すべて平城宮と同範のものばかりであり、平城京内にありながら、京あるいは寺院特有の瓦がきわめて少ない。

このほか、三彩丸瓦も注目される資料である。筒部凸面と段部に施釉があり、凸面は緑色のベースに褐色と白色が鹿子状に配置される。褐色と白色は縦横互い違いに並ぶが、この配置は三彩平瓦と同じである。

道具瓦は、鬼瓦4点、熨斗瓦9点、面戸瓦1点が出土している。

木簡

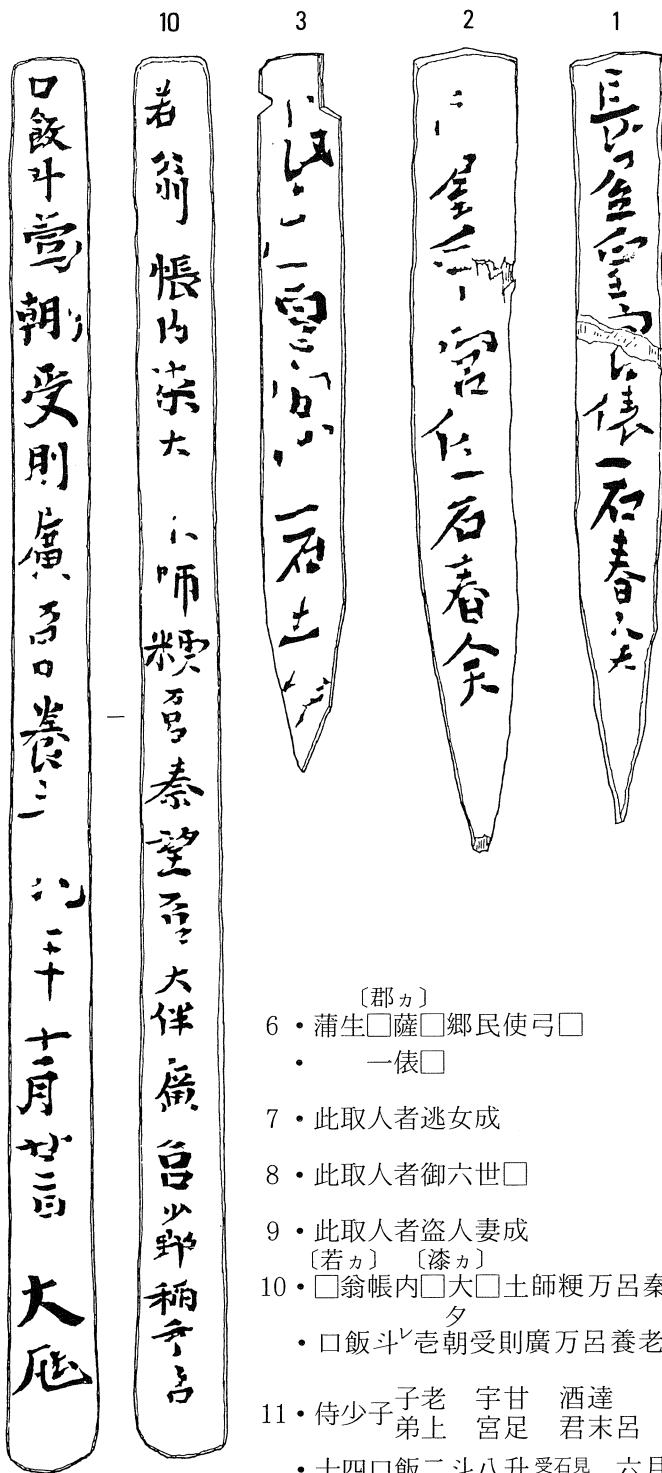
北区東寄りで検出した井戸跡（土壇）SE180から出土した木簡は228点ある。米・飯など食料関係の文書・荷札・付札が中心で、伴出した遺物には土器や箸もあることから、当地に居住していた人物の家政をあずかる機関の中でも、厨（くりや）に関わるものであった可能性が強い。

1～3は長屋王の宮＝邸宅で消費される白米1石を入れた俵に付けられていた付札で、裏面に書かれた羽咋直嶋は、この白米を舂（つ）いた人夫である。10と11は帳内・少子への飯の支給に関するものである。帳内は、親王・内親王に支給されたトネリで、雑務に使われた下級の官人のことである。荷札木簡の中で国郡名のわかるものが7点あり、そのうち5・6など、近江国のものが5点を占めているのが特徴である。また、用途不明ながら、興味ある語句を書いた木簡も出土した。7～9の3点で、戯れ書きのたぐいであろうか。SE180出土の木簡にみられる年紀は、養老元年（靈龜3年・717）に限られる。

このほかに、SE117の井戸枠抜き取り穴埋土や、SE211の井戸枠内などから合わせて16点の木簡が出土している。

5 まとめ

1987年度の調査により、左京三条二坊七坪のほぼ全域の発掘が終わり、一・二・



木簡 积文

- [宮カ]
- 1・長屋皇□俵一石春人夫
・羽咋直嶋
- [長カ 皇カ]
- 2・□屋□宮俵一石春人夫
・羽咋直嶋
- [屋カ]
- 3・長□宮俵一石 □
・羽咋直嶋 □
- 4・犬六頭新飯六升瘡男
・六月一日麻呂
- 5・犬上郡凡原郷川背舍人
・乙米五斗
- [郡カ]
- 6・蒲生□薩□郷民使弓□
・一俵□
- 7・此取人者逃女成
- 8・此取人者御六世□
- 9・此取人者盗人妻成
- [若カ] [漆カ]
- 10・□翁帳内□大□土師粳万呂秦望万呂大伴廣万呂少野稻□□
・口飯斗^夕耄朝受則廣万呂養老元年十二月廿二日 大尾
- 11・侍少^子老 宇甘 酒達 国嶋 久比 石見 石末呂 右
弟上 宮足 君末呂 廣国 多比 □□ 豊□
- ・十四口飯二斗八升受石見 六月廿七日
- 12 伊豆国賀茂郡賀茂郷川合里伊福部調荒堅魚十一斤十 □

図24 SE180
出土木簡 (1:2)

八坪の一部についても調査がすすめることができた。1986年度に行った第178次調査の成果も合わせ、明らかになった点と残された問題を指摘しておこう。

1) 奈良時代当初の敷地は、4坪(町)を占めていたことが確認できた。この敷地の中には、塀で囲まれたいくつかの大きな区画が設けられ、内部に大規模な建物群が配置されていた。注目すべきことに、敷地の一面に掘られた土壌の中から出土した木簡により、この邸宅の居住者をほぼ確証することができた。

長屋王は高市皇子の嫡男で、天武天皇の孫にあたる。和銅3年(710)の平城京遷都当時には、従三位式部卿で、その後、大納言、右大臣を経て、神亀元年(724)には、正二位左大臣の地位にのぼった。天平元年(729)2月、政権の首班であった長屋王は、「ひそかに左道(道教の呪術)を学び、国家を傾けんと」した疑いをかけられ、自尽した。同時に、妃であった吉備内親王や子息の4人の王らも首を吊って自殺したと記録されている。

この遺跡は、長屋王と妃の吉備内親王の邸宅跡であった可能性が強く、遺構変遷の時期区分との関係でいえば、平天元年における建物群はA2期と考えられる。A3期になると、建物群は塀で細分されるが、その理由は、明らかでない。

2) A期については、調査区の北側にも、掘立柱塀で囲まれた大きな区画が続いていることが確かめられた。その内部の状況を解明する調査は、これからの残された大きな課題の一つである。

3) B期の具体的な年代については、坪境小路の側溝やA期の建物の柱抜き取り穴から出土した土器により、恭仁京から遷都した天平17年(745)を相前後する時期と考えられる。

4) 奈良時代後半期に想定されるC期には、再び2ないし4坪の広大な敷地になる。宅地の中心部分は、西寄りの、これから調査をすすめていく予定の場所と推定されるが、これまで平城京内で調査された大規模な宅地にみられるような、左右対称形を基本とした整然とした建物配置の状況は認められない。この時期の建物群の性格の評価については、今後の調査の進展にまつところが多い。

1 はじめに

この調査は店舗建設に伴なう事前調査である。調査地は、東が市道三条・法華寺線に、南が国道24号線バイパスと菰川に隣接しており、平城京左京二条二坊十四坪の南端部にあたる。また、調査地は平城宮東院から東へわずか300mのところに位置し、藤原不比等邸（後の法華寺）、阿弥陀浄土院（調査地付近の小字名は浄土尻）にも近接している要地である。さらに、調査地東に隣接する畑地では施釉瓦が、西に隣接する十二坪では一町占地の複廊をもつ儀礼的建物が、十三坪でも一町占地の時期が確認されている（図27）。こうした状況から予想されたとおり、調査地では多数の奈良時代の建物跡が発見された。

このほか、注目すべき発見として、奈良時代の遺構面より下の従来“地山”と称されてきた地層から出土した大量の旧石器をあげることができる。

2 基本層序（図25）

奈良時代の遺構検出面までには、現代の水田耕作土、床土を含む厚さ80cm、計5枚の地層がある。これらの地層の間には遺構は存在しなかったが、灰褐色砂層から奈良、平安時代の遺物（土器、宋銭：熙寧元寶）が出土した。奈良時代とそれ以降の遺構は灰色粘土層上面、あるいは、暗褐色粘土層上面で検出した。灰色粘土層は奈良時代の遺物を大量に含み、調査区西半部では上部に木炭を含んでおり、奈良時代の整地層といえる。暗褐色粘土層以下の地層は従来“地山”と称されていた地層

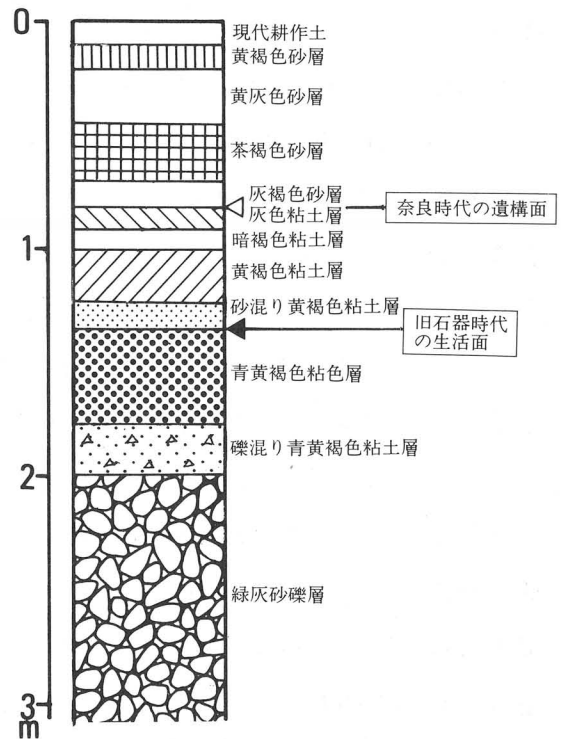


図25 基本層序模式図

であったが、今回砂混じり黄褐色粘土層（場所によっては粘土混じり黄褐色砂層）の下部、および青黄褐色粘土層上面（旧石器時代の生活面）から700点を越す石器が発見された。青黄褐色粘土層以下の地層からは今のところ遺物は未発見である。

3 奈良時代以降の遺構の概要（図26、図28）

検出した遺構は、掘立柱建物32棟、掘立柱塀12条、井戸1基、土壇、溝、瓦敷などである。これらは大半が奈良時代に属し、奈良時代の遺構は重複関係と配置、そして、柱穴出土の土器と瓦の年代から少なくとも7期に区分できる。

A期 掘立柱建物6棟と塀1条がある。南北棟SB18（柱間6尺）の西側柱、SA17（柱間7尺）、東庇付き南北棟SB15（身舎3間×2間）と東西棟総柱建物SB13（3間×2間）の西側柱はそれぞれ筋をそろえている。それらの東には東西棟SB08（柱間8尺）、SB04（柱間10尺）がある。後者の柱掘形は1辺1.5m、深さ1m以上ある。西には東西棟SB30と南北棟SB24（柱間7尺）がある。

B期 掘立柱建物6棟、塀1条がある。調査地東半の南北棟はいずれも3間×2間と思われる。柱間はSB06が10尺、SB07が6尺、SB14が8尺、SB12が9尺である。SB06とSB07は南妻柱筋をそろえている。西のSA32（柱間9尺）がとりつく東西棟SB26とSA32の25尺北に建つSB35（柱間7尺）は、柱穴内の埋土がともに灰色を呈する。

C₁期 掘立柱建物5棟、塀1条で、南北塀SA21（柱間7尺）は十四坪の東西中心線上に位置するが、坪の北端まで延びているか否かは不明である。SA21から70尺東にSB03（柱間8尺）がある。SB03の北30尺には南広庇付き東西棟SB10がある。これは第89次調査区の南西隅の建物の西妻にあたり、身舎が桁行7間（柱間8尺）、梁間2間（柱間7尺）、庇の出は10尺である。SA21の西10尺の位置には西庇付き南北棟SB29がある。身舎は桁行5間（柱間7尺）、梁間2間（柱間8尺）で、庇の出は8尺である。SB29から西へ20尺において東西棟SB43がある。桁行5間（柱間7尺）、梁間2間（柱間8尺）であり、特色として両妻柱から南1間のところにも柱穴がある。柱穴は一辺約1.5mと大きい。南にも東西棟SB39（柱間9尺）がある。

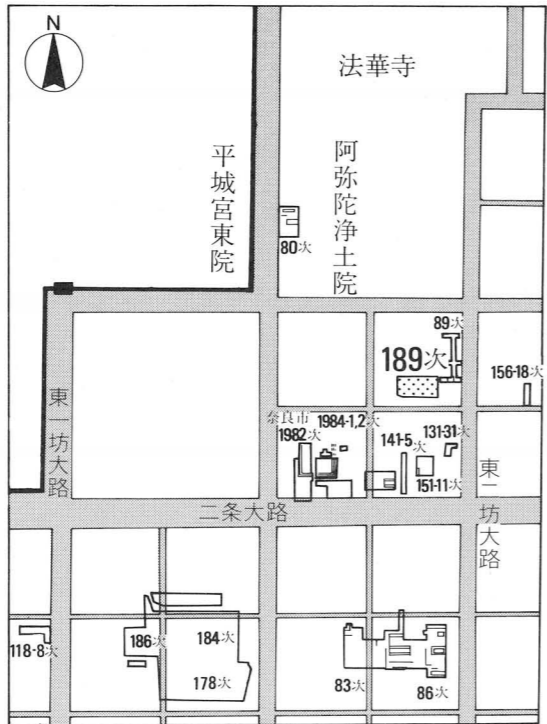
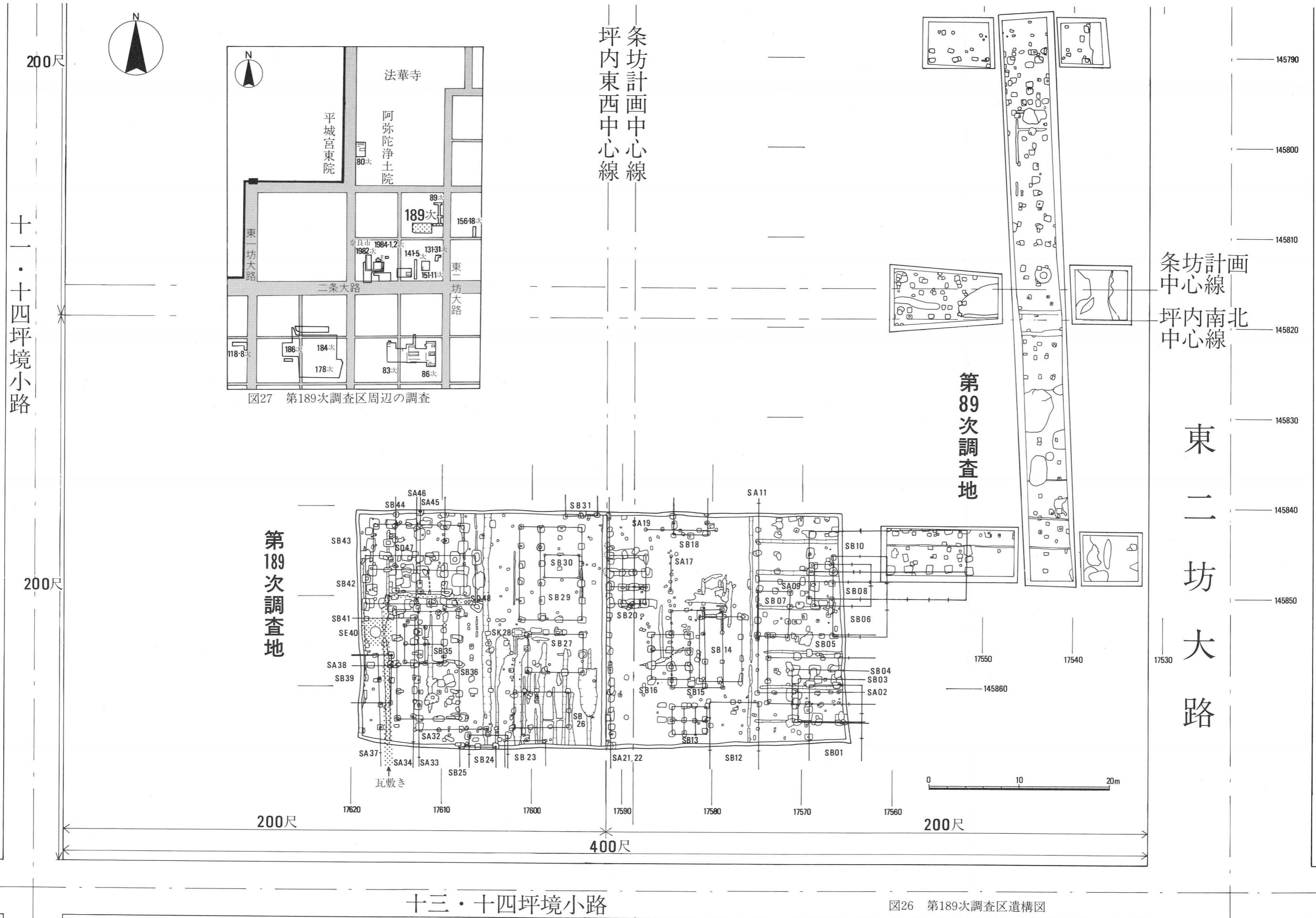


図27 第189次調査区周辺の調査

図26 第189次調査区遺構図

第89次調査地

第189次調査地

条坊計画
中心線
坪内南北
中心線

東
二
坊
大
路

200尺

200尺

十一・十四坪境小路

200尺

400尺

200尺

十三・十四坪境小路

145790

145800

145810

145820

145830

145840

145850

17550

17540

17530

145860

0 10 20m



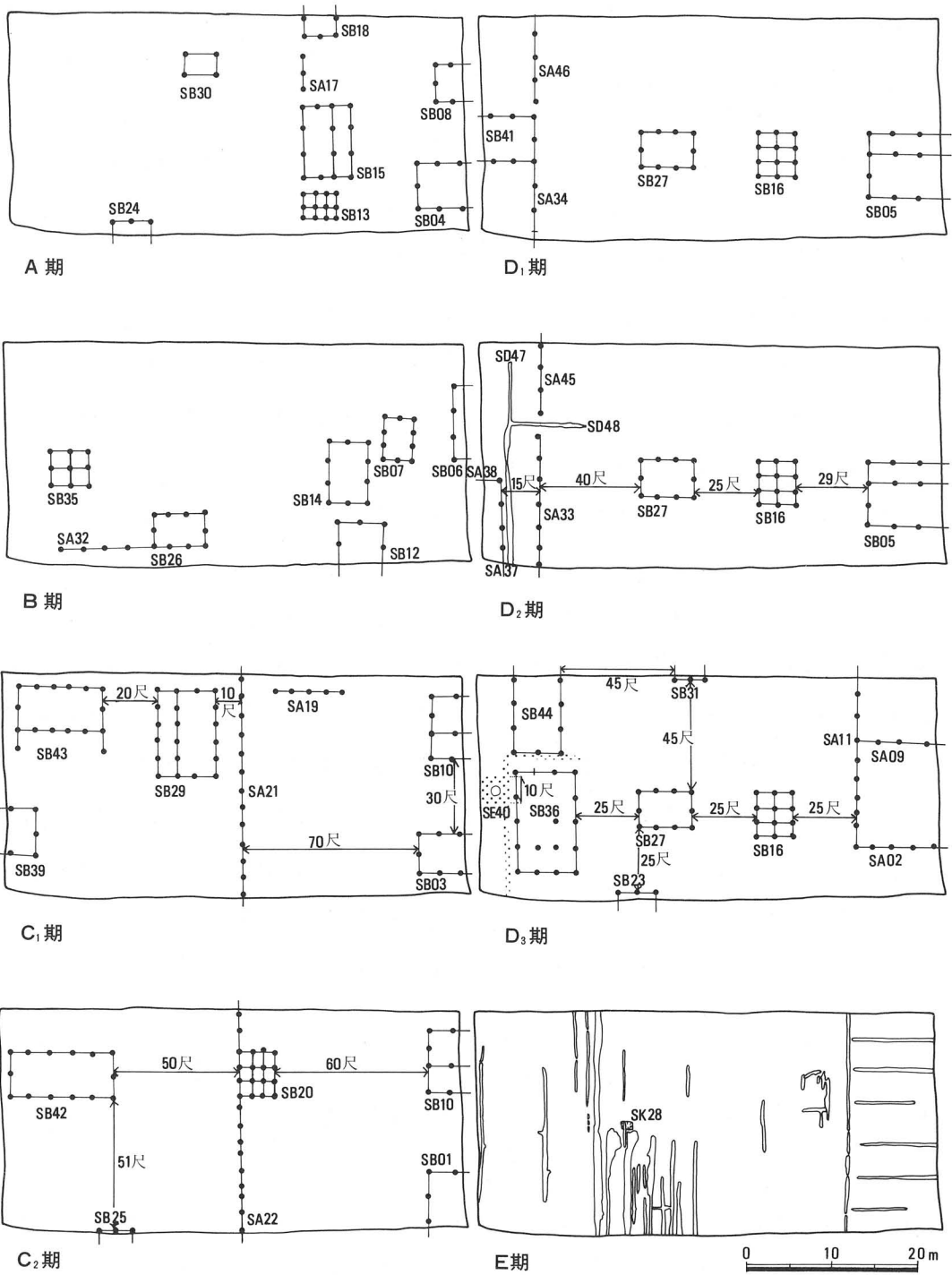


図28 遺構の変遷図

C₂期 中央の塀を6尺等間に改作し、これに接して3間（柱間5尺）×3間（6尺）の総柱建物SB20を建てる。柱は4条の東西方向の布掘り掘形中に建てる。これとSB10は60尺の距離をもつ。側柱柱間8尺、妻柱間9尺。SB03が南北棟01（柱間10尺）に改作される。SA22の西50尺の位置にC₁期SB43を改作した東西棟SB42がある。これはSB20と柱筋をそろえている。南には南北棟SB25（柱間7尺）がある。

D₁期 中央の塀はなくなる。調査区西端の東西棟SB41にとりつく塀SA34とその北のSA46（柱間9尺）が設けられる。門を東へ入ると、北の柱筋をそろえた建物が3棟ある。東西棟SB27（柱間7尺）、南北棟総柱建物SB16（柱間6尺、7尺）、北庇付き東西棟SB05（身舎側柱柱間10尺、妻柱柱間9尺）である。

D₂期 南北塀SA34、46は、柱間は9尺のままSA33、45に建て替えられる。この塀の配置は南北溝SD47と東西溝SD48に規制されている。SA33の西15尺のところにもL字形の塀SA37、38（柱間9尺）が設けられる。

D₃期 SB16、27を除く建物が建て替えられる。南北塀SA11、南北棟SB36が既存建物SB16、27から25尺の間隔をおいて建てられる。SA11には東西塀SA02、09がとりつくが、区画施設内の性格は不明である。南北棟SB36は桁行4間（柱間10尺）、梁間3間（柱間8尺）で、部分的に束柱をもつ。これは北の南北棟SB44と西側柱筋をそろえている。SB36の西、北側にはD期のSD47、48を埋めて、瓦敷が設けられ、さらにこれに接して井戸SE40が作られる。SB27の南25尺には南北棟23が、北45尺にはSB31がある。

E期 付近にあった鑄造関係施設の廃棄物用に掘られた土壙SK28（鑄造に使用した鞆の羽口、坩堝、木炭、銅滓などが出土）と平安時代以降の多数の溝である。溝の中には一定の配列をもつものがあり、とくに東のものは第89次調査区の溝につながり、東二坊大路まで延びている。

井戸SE40（第29～31図） 直径2.4m、深さ2.8mの円形の掘形をもつ。井戸枠は円形（実際は正15角形）縦板組（15枚、1枚の全長2.8m、幅24～26cm、厚さ6cm）で、縦板側面の上部和下部を太柄で固定している。また、ほとんどが下

端に棧穴をもつ。掘形最上層はバラスと砂で固め、さらにその上は一辺10尺の正方形の瓦敷にする。瓦敷きの西半はその後攪乱される。井戸枠内の埋土は最下層に水の濾過用の木炭が厚さ15cm（総重量45kg）敷かれる。木炭の量は平城宮、京の井戸では最多である。その中から地鎮具として使用された万年通寶とガラス玉が出土した。木炭層の直上には“酒”と墨書された奈良時代末期の土器が廃棄される。さらにその上には檜皮、斎串、木簡を含む木屑層と完形の丸瓦を多数含む瓦層がある。

各時期の年代 上記の各遺構から出土した遺物は現在整理中であるので、現時点での所見を述べる。C期の建物からは平城Ⅱ、Ⅲ期の土器が出土し、また、C₂期のSB20の柱穴から軒瓦6663C、6721Gが出土していることから、その年代を平城還都後の奈良時代中～後期とすることができる。したがって、A、B期は恭仁遷都以前の奈良時代前半と考えられる。D期はSB16の柱抜取穴とSE40の枠内埋土木屑層から平城V期の土器（図35-4～14）が、井戸SE

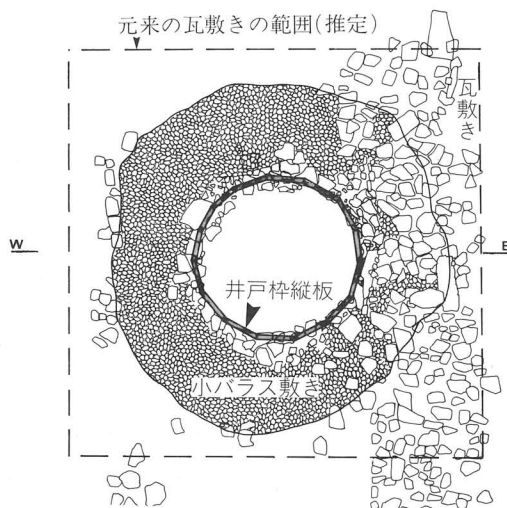


図29 井戸SE40平面図

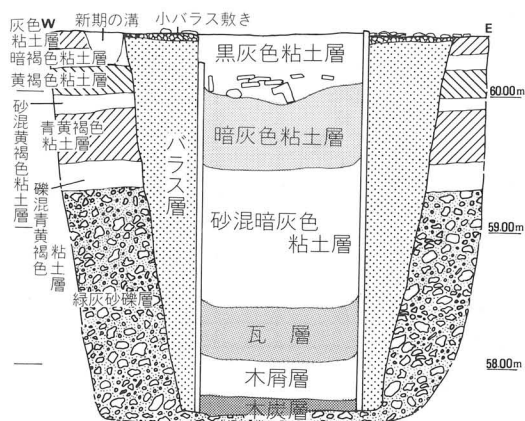


図30 井戸SE40地層断面図

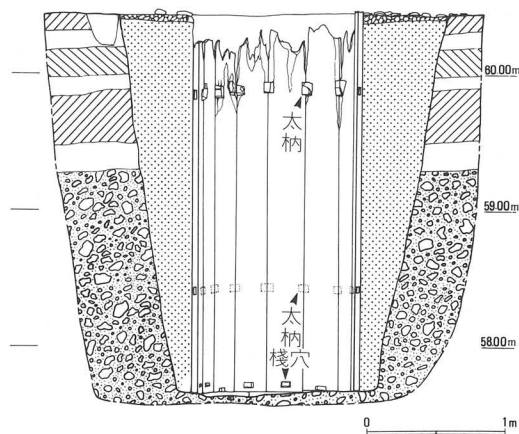


図31 井戸SE40井戸枠構造図

40の底から地鎮用万年通寶が出土していることから、奈良時代末期に位置づけられる。井戸SE40の井戸埴埋土中部から平安時代初期の土器（図35-1、2）が出土しているので、この頃には埋戻されたようである。土壌SK28はD期のSB27を切っているので、平安時代以降に属す。

4 遺物

瓦埴類、土器、木製品、金属・ガラス製品、土・石製品、木簡などがある。

瓦埴類（表6、図34）軒丸瓦は10型式10種38点、軒平瓦は12型式17種31点が出

軒丸瓦				軒平瓦			
型式	種類	小計	計	型式	種類	小計	計
6151	不明	1	1	6644	A	1	1
6225	A	1	4	6663	C	2	2
	C	2		6664	C	1	1
	?	1		6665	A	2	2
6275	A	1	1	6667	A	1	1
6282	Db	1	6	6681	A	1	3
	H	3		B	1		
	不明	2		不明	1		
6296	A	6	6	6682	C	1	1
6301	B	5	6	6688	Ab	3	3
	不明	1		6691	A	1	1
6308	I	1	2	6702	E	1	2
	不明	1		新形式	1		
6311	A	4	4	6721	F	2	7
6314	A	1	1		Gb	4	
不明		1	1		H	1	
				6732	不明	1	1
				6760	A	2	3
					B	1	
				不明			2

表6 軒瓦集計表

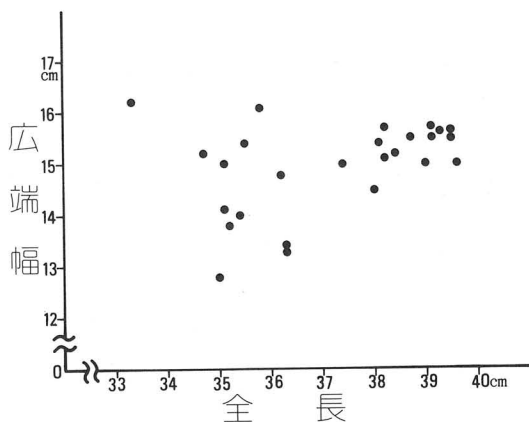


図32 井戸SE40出土の丸瓦の長さ・幅

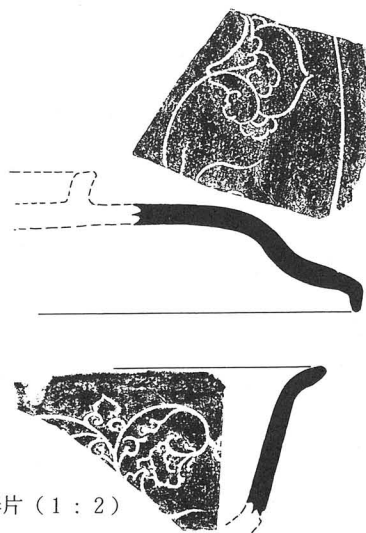


図33 唐草文陰刻須恵器片（1：2）

土した。平城Ⅲ期のものが多い。軒瓦の組み合わせとしては6282H—6721Gが目立ち、とくに6721Gは範の彫り直しのものが主体である。井戸SE40の枠内埋土からは6296A、6301Bが多く出土したが、6691Aは1点で本調査地での組み合わせは確定できない。また、井戸SE40瓦層からは完形に近い丸瓦が31点出土し、その大きさから4種類の規格性が推定できる（図32）。施釉瓦は9点（緑釉7点、三彩2点）出土し、これには軒丸瓦、軒平瓦（6760B）が含まれている。

土器 特筆すべきものは灰色粘土層出土の唐草文陰刻の須恵器片（蓋と碗形の身）である（図33）。従来平城宮内の東院などで5例出土しているだけであった。奈良時代初期のものである。井戸SE40の木屑層最下部からは、“酒”と墨書された杯、高杯を含む奈良時代末期の一括出土土器が発見された（図35—4～14）。

木製品 井戸SE40の木屑層からは2型式3種21点の齋串が出土した（図36—1～8）。まったく同一規格の齋串が数点ずつあることから、ある厚さをもった材から同一規格の齋串を何枚も割り出していった工程がうかがえる。

金属・ガラス製品 金属製品には井戸SE40木屑層から出土した三爪の熊手と同木炭層から出土した萬年通寶がある（図36—9、14）。また、SK28からは銅滓が出土した。ガラス製品にはSE40木炭層から出土した青色のガラス小玉がある（図36—10）。

土・石製品 土製品にはSK28から出土した鞆の羽口（図36—12）と埴塙の破片がある。石製品は自然石に円孔をあけた紡輪形を呈している（図36—11）。

木簡 “海藻根（みるめ）”と書かれた荷札がSE40木屑層から1点出土した。

その他 SK28からは鑄造関係の遺物に混じってウリの種子が多数出土した。

5 奈良時代以降の遺構・遺物のまとめ

（1）奈良時代には建物の立て替えが頻繁に行われていた。施釉瓦や唐草文陰刻須恵器のような希少価値のある遺物の存在は、この坪が高級貴族の宅地であったことを示す。十四坪周辺の調査結果を総合すれば、坪境をまたぐ施設は未発見であるので十四坪を含めた四町占地の可能性は低い。

（2）瓦からは阿弥陀浄土院との関連は定かでない。施釉瓦は第89次調査分（61

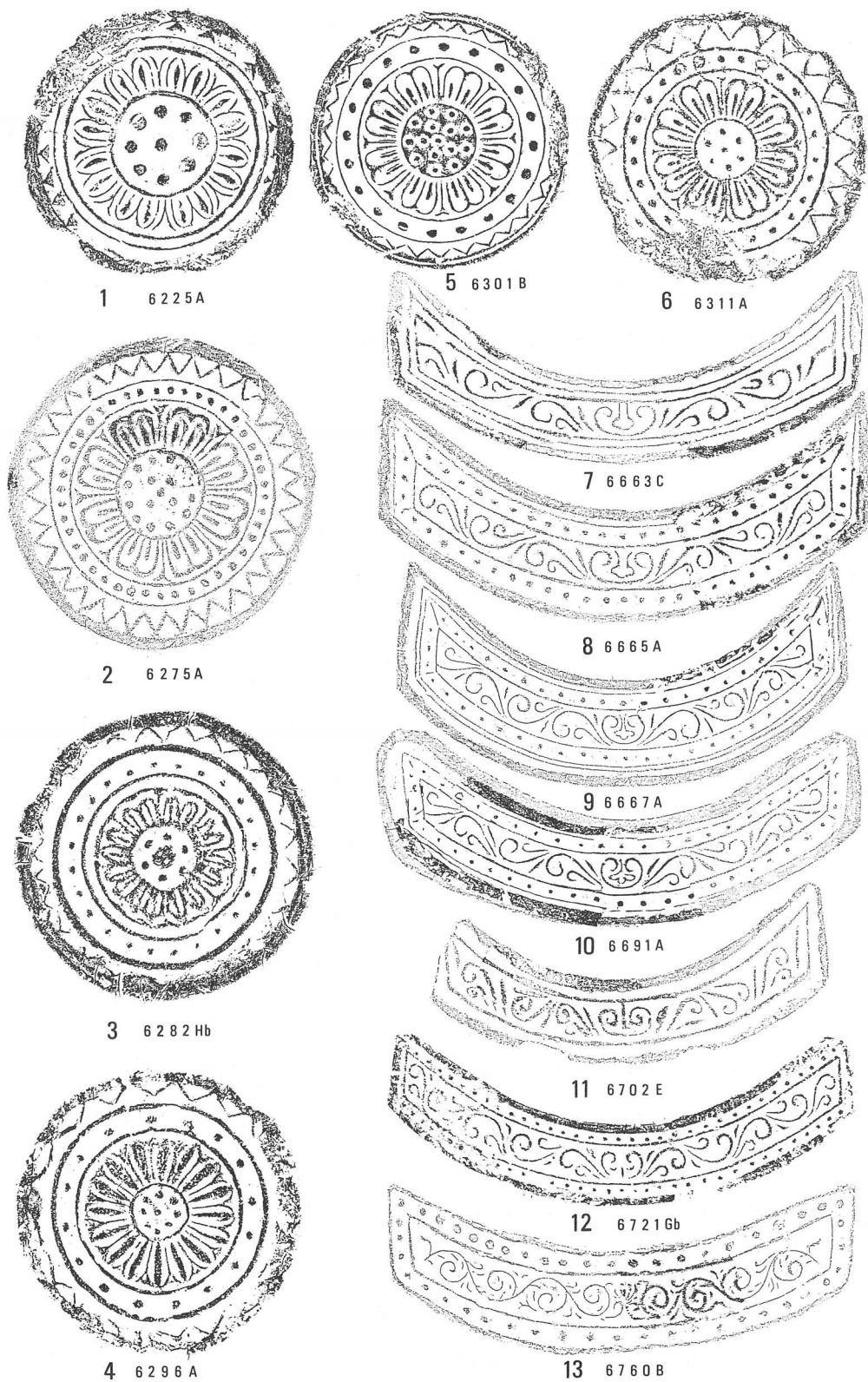


图34 軒瓦(1:4)

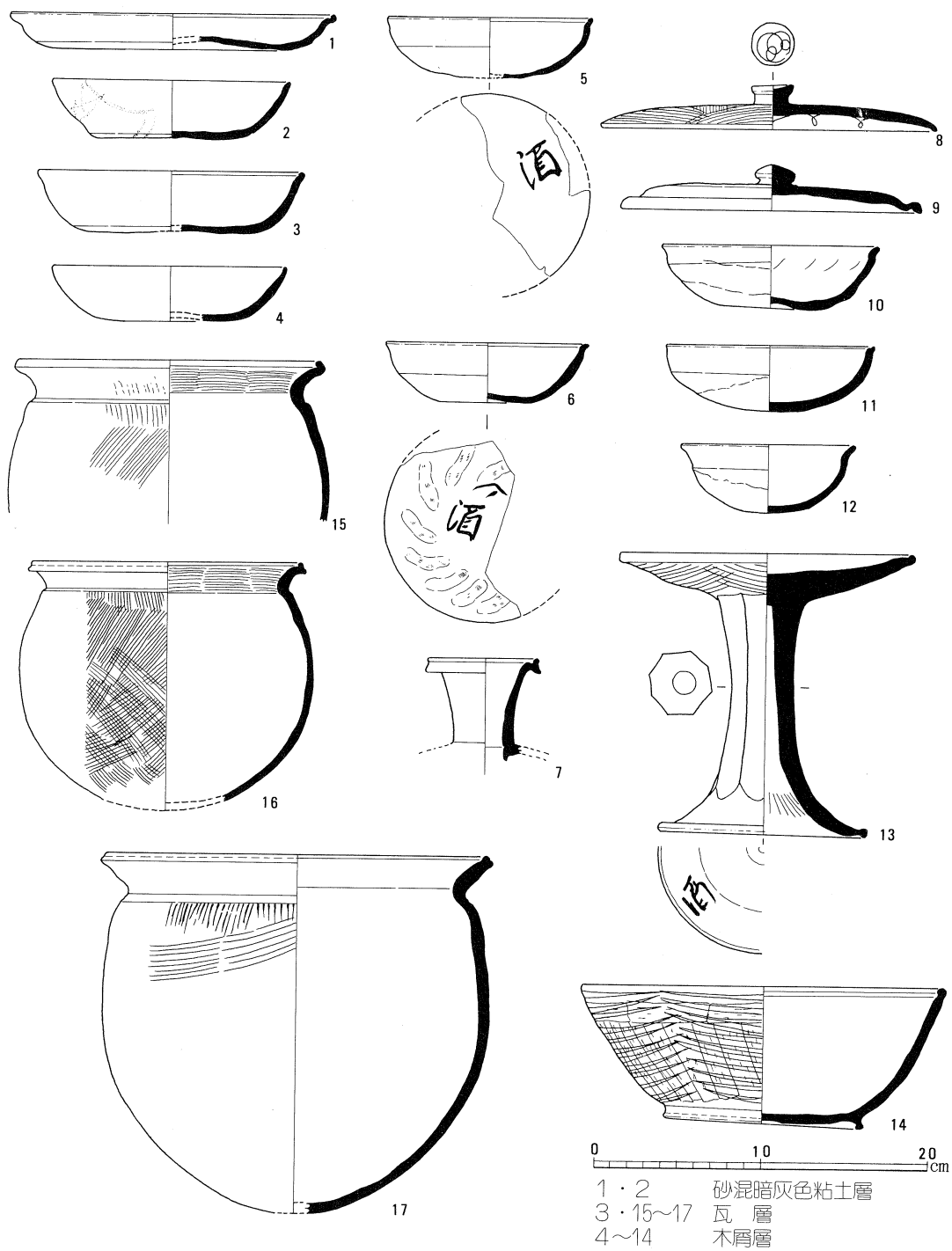


图35 井戸SE40井戸枠内埋土 出土土器

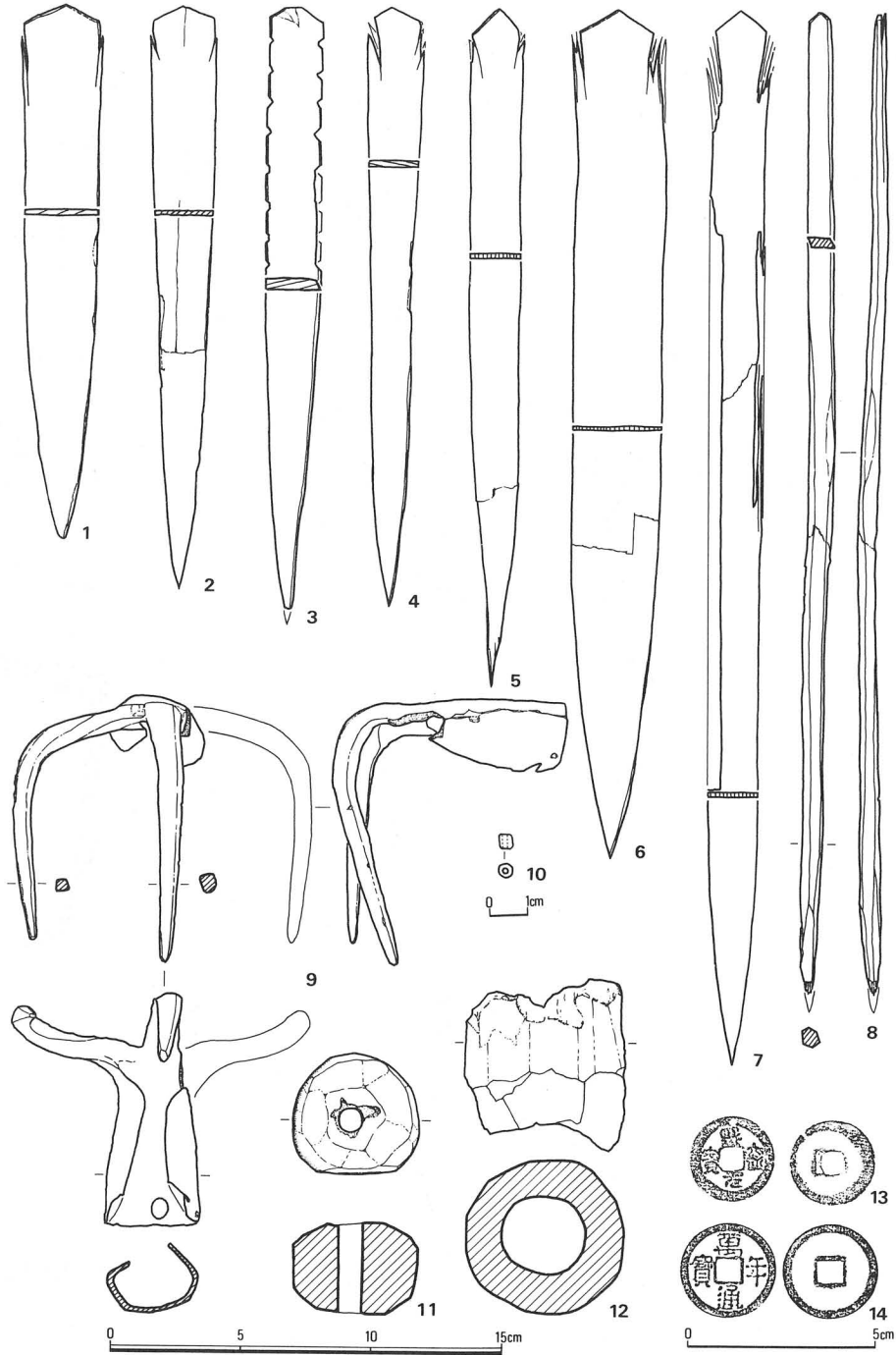


図36 第189次調査出土木製品・金属製品他実測図（1：3、ただし10・13・14は2：2）
 1～8 斎串 9 熊手 10 ガラス玉 11 紡輪形石製品 12 鞆羽口 13 熙寧元寶 14 萬年通寶
 1～10・14 SE40 11 SB29 12 SK28 13 包含層 出土

点)と合わせて考えると、SB10付近に集中しており、施釉瓦は坪内の特定の性格の建物に葺かれていた可能性が高い。

(3) 平安時代に本坪内で何らかの鑄造活動が行なわれた。

6 旧石器時代の石器集中区

旧石器時代の石器(以下旧石器とする)の発見の経緯

3月中旬以降、建物の重複関係の検討と柱穴の縦断面の図化を行ってきたところ、調査区中央部と西南部の2ヶ所の柱穴で白く風化したサヌカイトを使用した石器(石核と剥片)が12点発見された。これらは風化が縄文、弥生時代のサヌカイト製石器に比べて進んでおり、調査区からは縄文、弥生土器が未発見であることから、旧石器の可能性が高いと推定された。奈良時代の遺構の調査を終了後、石器採集位置を中心にA、B、Cの3トレンチ(図38)を設定して、それらの石器の元来の包含位置を確認する調査を行った。この結果、奈良時代の遺構面から50cm下の砂混じり黄褐色粘土層、青黄褐色粘土層からナイフ形石器、石刃、細石刃、翼状剥片という旧石器時代を代表する石器を含む多数の石器を発見し、石器が旧石器時代のものであることを確定した。

旧石器の出土状況

出土した石器は、A、Bトレンチにおいて、第37、39図に示したように直径2～3mの円形に近い集中部分を持つ分布をしており、それが3ヶ所ある。とくに第2石器集中区では礫皮つきの剥片、碎片を含む実に700点を越す石器が出土した。このことから3ヶ所で石器の製作が行われていたこと、これらの旧石器人が残していったものが、その後の気候や流水の影響で上下していても、水平的にみれば元来の場所をほとんど動いていないことがわかる。

石器(巻末写真)

旧石器の総数は採集品14点も含めて794点を数えている。その内訳は、ナイフ形石器10点、石核9点、石刃・細石刃102点、翼状剥片1点、その他の剥片類(縦長剥片主体)672点である。石材はすべてサヌカイトである。

ナイフ形石器……小型の縦長剥片、石刃を使い、その一側縁ないし二側縁の一部



図37 Bトレンチ石器平面分布図

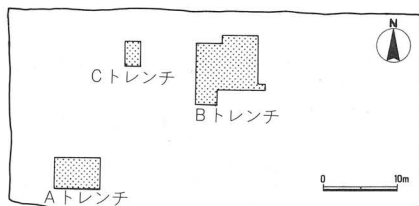


図38 旧石器検出用トレンチ位置図

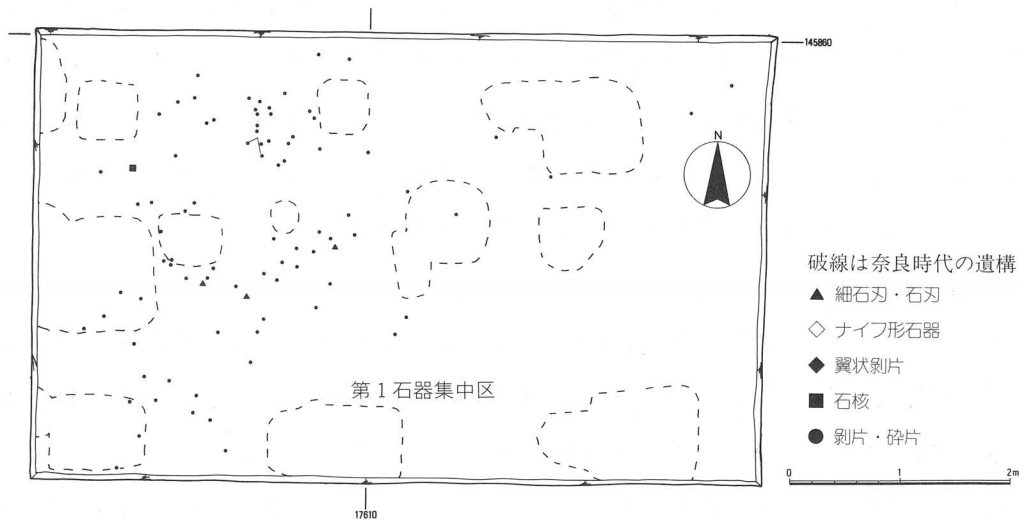


図39 Aトレンチの石器平面分布図

を連続して細かく剥離し、一部分は未加工のまま鋭い刃にしている。近畿、中国、四国地方では、このタイプのナイフ形石器は少なく、旧石器時代の地層からまともに発見されたことも少ない。後述する翼状剥片をナイフ形石器の素材として使うことが圧倒的に多いことと対照的である。

石核……石核が石刃、細石刃と接合する例もある。石核はすべて剥片を素材にし、細かい調整を省略した単純なものである。船の底のような形をしたものが5点あるが、いずれも素材である剥片の面を多く残している。石刃、細石刃のそれぞれの石核の詳細な検討は、今後の課題である。翼状剥片の石核は未発見である。

石刃、細石刃……石刃は長さ3～4cmと小型でナイフ形石器の材料になっているが、それ自体を直接使用していた可能性もある。今回それよりもさらに小型の石刃が量的に出土していること、前述した小型の船底形石核上に微小な石刃を剥離した痕があることから、これらを積極的に評価して萌芽期の細石刃と理解しておく。

翼状剥片……これらは瀬戸内技法で剥離されたものである。

旧石器発見の意義と課題

(1) 本調査は奈良市内で初の旧石器の調査となった。奈良県内での旧石器は、二上山などの標高の高いところで発見されてきたが、奈良盆地の標高60m程度の低いところで、しかも従来“地山”とされてきた粘土層にも存在することが確認できた。

(2) しかも、石器が二次的に大きく動かされず、同一時期の石器製作址の状況が非常に良好に把握できる。こうした例は西日本においては未だ数少ない。

(3) 碎片、剥片が大量にあることから、この場所で石器の製作が行なわれたことは確実であり、今後の技術研究が期待される。ナイフ形石器以外の石器製作道具の石製ハンマーが未発見なので、旧石器人はそれらをもって別の場所（近接した場所の可能性あり）に移動したと考えられる。

(4) 石器群の時期はナイフ形石器に新しい時代の要素である細石刃が加わり始める段階である、という見通しを今回提示しておく。実年代は1.3～1.5万年前と推定されるが、C₁₄年代測定も含めた今後の検討の中で明らかにしたい。

7 右京九条大路・坪境小路の調査 第125-5次

県道城廻り線建設に伴う事前調査で、今回の調査が佐保川以西での調査としては最終調査となる（城廻り関連調査一覧は下表参照）。流路が北へ移動したため調査可能になった可児川旧流路部分（九条大路路面敷）で、右京九条一坊四・五坪坪境小路と交差すると想定される箇所で調査を実施した。調査地は、125次調査Ⅲ区の南西にほぼ接した位置にあたる。土層は、調査地南半では、現地地表下1.6mは可児川旧流路にあたり、北半は1m余の盛土下で耕土、暗茶褐色土となっているが、いずれもその下層は黄青灰粘質土・暗褐色砂質土・暗褐色粘質土で、青灰粘土（地山）となる。遺構は暗褐色粘質土面で、東西溝3条と南北溝1条を検出した。中央部の東西溝2条は細溝であるが、北端の東西溝は素掘りで南肩のみの検出で、深さ0.7m幅は現状で1mである。埋土は砂を含んだ灰黒粘質土と暗黒灰粘土で、土器・瓦を含む。九条大路北側溝にあたりと考えられる南北溝は幅3m、深さ0.7mで、黒色粘土と灰色砂で埋まっている。東西溝が切っている茶褐色粘質土が南北溝の西半にかぶっていることにより、南北溝埋立て後に東西溝が掘られていたことがわかる。

表7 県道城廻り線関係調査

次数	時期	面積	関係文献
125次	80.11~81.1	1,163	平城京九条大路 (81.3刊)
125次 補足	81.8	350	昭和56年度 平城概報
141-36次 (125-3次)	83.3	80	昭和57年度 平城概報
125-4次	83.7	126	昭和58年度 平城概報

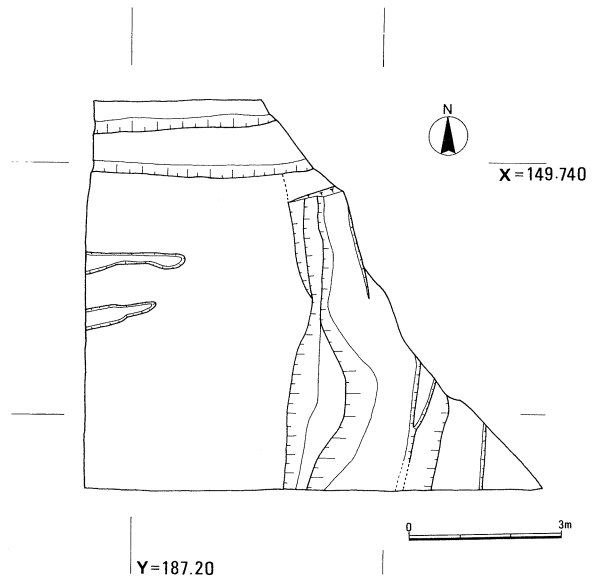


図40 第125-5次遺構配置図

8 西大寺境内の調査

本年度の防災工事は、本堂と護摩堂を対象としたもので、貯水槽から東塔跡の東を通過して本堂と護摩堂にいたる配管予定地で調査を行なった。防災工事関連調査報告書は工事最終年度に刊行予定であるので、ここでは各区の調査成果の概要を簡単に述べるにとどめたい。

I 区

護国院の東に設けた、南北10.5m、東西6mのL字形のトレンチである。南半と東辺が各々60・61年度の調査区と重複する。旧表土下の北半は近世の池跡（SG2）で、南半は中世以降の遺物を含む暗灰褐色砂質土の整地土である。奈良時代の遺構は黄褐色粘土の地山上で検出した。SB1はすでに60年度調査で検出している掘立柱の東西棟建物で、今回北庇を確認した。柱間は身舎と同じく6尺（1.8m）である。

II 区

護国院の北側の参道に設けた、幅2.5m、長さ33mの東西トレンチである。東端はI区と、西端はIII区と連続する。トレンチの東半にはI区から続く幅約7mの近世の池跡SG2があり、その北岸と北西の角を検出した。北岸には人頭大の石を並べて護岸としている。SG2より西では、旧表土下に黄灰色砂質土の整地土があり、この層の下で中世の遺構を検出した。SD9は幅4m以上、深さ0.8mの南北溝で、埋土に鎌倉時代から室町時代の遺物を含む。SD9の北肩は室町時代から江戸時代の遺物を含む土壌によって壊されており、この土壌の底では中世の南北溝SD11（幅0.8m）を検出した。SD9とSD11は北延長部をV区で確認している。

奈良時代以前の遺構は地山上、あるいはその上に薄く堆積した暗黄褐色土・茶褐色土の上面で確認した。SA3・SA4・SA6・SA7は、SG2とSD9の下層で検出した掘立柱南北塀である。SA3・4、SA6・7がともに5尺（1.5）mを隔てて並ぶ。SD5はSG2の底で検出した幅2.3mの南北溝である。

SB8は1間分を確認したにとどまるが、本来はさらに1間東に延び2間の妻柱と考えられる。SA12は南北方向の築地塀で、西辺を近世以降の土壌に破壊されており、基底部の幅3.8m、高さ0.3mが残る。SA12の北延長部はⅢ区の東拡張区とⅤ区の西端にかかっており、北で西に約2度振れる。SD13は幅1.8m、深さ0.5mの南北溝である。奈良時代後半の土器が出土した。SD5との心々距離は19.5m（65尺）であり、両者は西大寺造営によって埋め立てられた西三坊坊間路の東西両側溝にあたる可能性がある。Ⅱ区西端で検出したSA14は掘立柱南北塀であろう。柱間は不明である。

Ⅲ区

東塔跡の東を通る、幅2m、長さ42mの南北トレンチである。表土下には中世以降の遺物を含む淡褐色砂質土・黄灰色砂質土・暗褐色土等が堆積し、その下が西大寺造営時の整地土（黄褐色粘質土）、地山（黄褐色粘土）である。整地土上で奈良時代後半以降の、地山上では古墳時代の遺構を検出した。

SA20は表土下で検出した江戸時代の南北塀である。奈良時代の遺構には、Ⅲ区中央に設けた東西の拡張区で検出した築地塀SA12と南北溝SD13がある。ともにⅡ区で検出したものの北延長部にあたる。南北溝SD21は、Ⅴ区のSD22と1.5m（5尺）を隔てて平行する幅0.2mの細溝で、SA12の堰板痕跡である。SX19は東塔の八角形基壇の掘り込み地業の一部であるが、拡張区が短く八角形基壇の本体にはとどいていない。

SD15、SB16・17、SD18は古墳時代の遺構である。SB16は南北3.5mの方形の竪穴住居跡で、西辺を検出した。床面には貼り床をしており、周囲の壁沿いに溝がめぐる。5世紀中ごろの土師器が出土した。SD15も竪穴住居跡の床面周囲の溝が残ったものであろう。掘立柱建物SB17は妻柱2間分を確認したが、調査区が狭く棟方向はわからない。SD18は幅0.8m、深さ0.6mの溝である。SB16の西辺とほぼ直交し、5世紀中ごろの土師器と須恵器が出土した。

Ⅳ区

本堂の東に設けた、幅1.5m、長さ40mの南北トレンチである。Ⅲ区の北端に

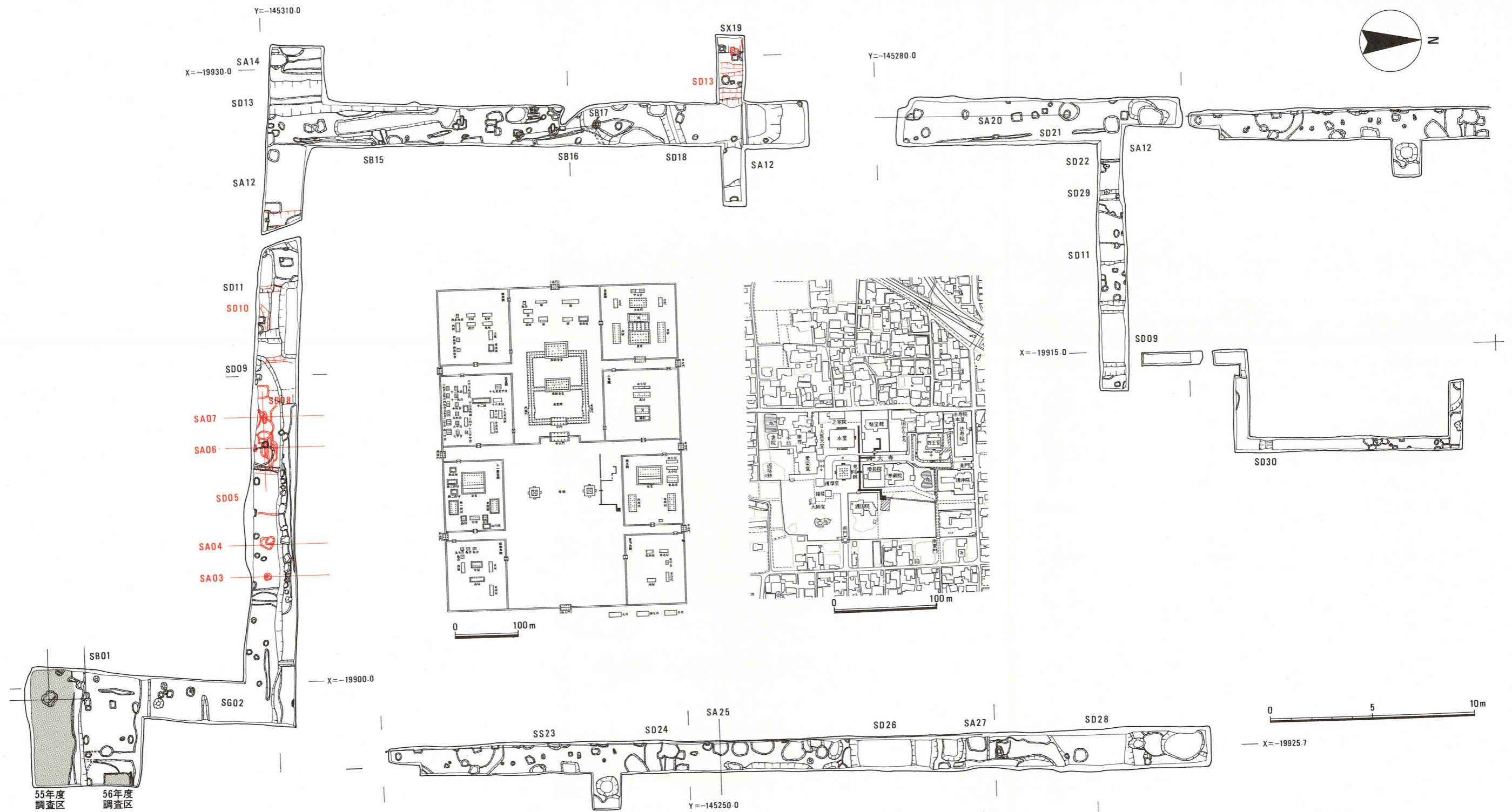


図41 西大寺境内発掘位置図および発掘遺構図 (1 : 200)

連続する。表土下には中近世の包含層が0.2～0.3mの厚さで堆積し、遺構のほとんどは黄褐色粘質土の地山上で検出した。

SA23は1.8m（6尺）等間の南北塀である。IV区の南端から南へ延びず、ここで西に折れ曲がる可能性が高く、本堂の足場穴列かもしれない。柱穴からは江戸時代の土器が出土した。SD26は幅3m以上の東西溝で、北岸を江戸時代の溝に切られているため本来の幅は明らかではない。埋土には多量の焼土と、13～14世紀を下限とする土器・瓦が含まれる。SA27はこの溝の北岸に接した東西方向の築地塀である。基底部の幅1.2mである。SD24は幅2mの東西溝である。SA25はこの溝の北約2mにある掘立柱東西塀である。ともに奈良時代の溝であろう。

V区

護摩堂前の参道に設けた、幅1.5m、長さ12mの東西トレンチである。西端がⅢ区と連続する。表土の下は遺物を含まない灰色砂層が薄く堆積し、その直下は黄褐色粘土の地山である。遺構はこの地山上で検出した。

SD9はI区で検出したものの北延長部である。幅3.8m、深さ1.3mの溝で、I区で検出した部分より深い。埋土は3層にわかれ、中層と上層には多量の炭と焼土を含む。これらは文亀2（1502）年の西大寺焼亡（『大乘院寺社雑事記』など）にかかわる埋め戻し土と考えられる。SD11もI区で検出したものの北延長部分であるが、深さ5cm程度しか遺存していない。

VI区

護摩堂前から堂の東辺と北辺にかけて設定した、幅0.7m、総長23mの鍵形のトレンチである。表土下約0.3mに近世あるいは室町時代の整地土があり、地表下0.7mで黄褐色粘質土の地山に達するが、トレンチの南端はSD9の上にかかっており、底に達していない。遺構はおもに整地土上で検出した。SD30は幅0.6mの東西溝で、室町時代のものであろう。

まとめ

今年度の調査によって、東塔の基礎地業、西大寺造営以前の右京一条三坊六坪の宅地関連遺構と西三坊坊間路、中世以降の西大寺にかかわる遺構を確認するこ

とができた。また、下層に古墳時代の遺構が存在することもわかった。

各トレンチからは古墳時代から近現代にわたる多量の遺物が出土した。土器には、灰釉陶器、白磁などいわゆる高級陶器が含まれている。瓦塼類では、西大寺創建軒瓦の良好な資料が出土し、西大寺所用軒瓦の実態がより明かとなった。また、創建時の軒平瓦には二彩・三彩のものがあることを確認したが、『建久御巡礼記』や『七大寺巡礼私記』などに、貞観の早魃時に西大寺の銅瓦あるいは青瓷の瓦が流れたことを書き記していることと考えあわせて、興味深い。

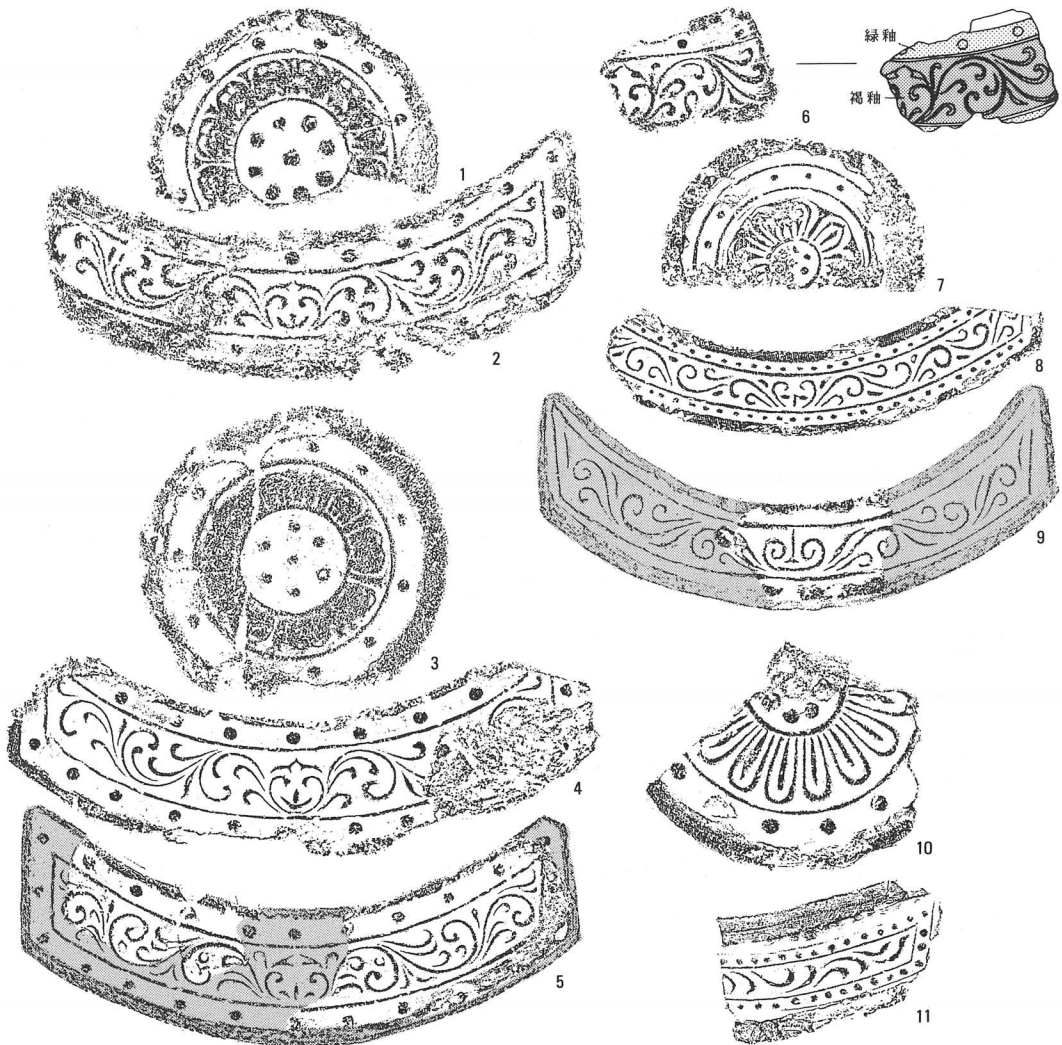


図42 西大寺境内出土軒瓦 (1. 6236A 2. 6732Q 3. 6236H 4. 6732R 5. 6732 F
6. 施釉軒平瓦 7. 6314A 8. 6721 E 9. 6702 F 10. 平安時代 11. 鎌倉時代)